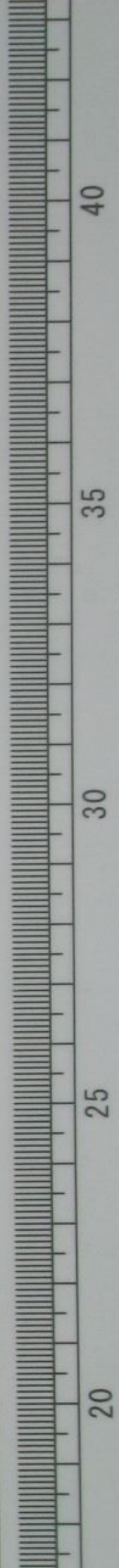




寄后歌谈

一  
壬寅

~ 4  
4425



へ4  
4425

4425

藤原芳樹大八著

寄居歌談 編 初

糸出齋藏板

大正十五年三月廿日  
奈良生順氏贈



加はれ歌より端書

我のまゝかりし時よりいさうころぞはすありて國をとな  
きはるとせむかりとちどいづこをさめしむなくはくしあり  
きつあるの都のうちれまむすま五條まゝりの小家をまむ  
あるの藤波の浦のうらぶしむはくし其のまろやをりてきて  
去るもともるもよかどなく人のまゝまふるまひ返りけるそれあ  
りさほろの寄居ガウキといふ虫のたのむたうもはくし見うまをり  
て尻さしめれおるまよいとよう似しむつうがうおのた  
のちるまとなんしむるまくるまもつとくはちやけのめし

○再々り

よりて國よりて没ハ才の志もなぐもさあむのさすの内  
まわりつれを寄居といふ名つきなくぞ。改めよといふ人あり  
控のしそきていそく。なかがりなまてあさりう侍りなんを  
ゆゑの今かく旅まれる清代はあいてやすらふ年月をす  
ぐ侍る事。更まじつもの力はあらずけ身の親よりりさ  
るものなり。け家の君よりりたるも此なり。控やよりりさ  
才のいんをよせ。君よりりたる家の才をよせて。世のうま  
りつとめいそく。いそくして名をあさり。君とおやとの流  
きみいつう。まむくす。うてくさぬ盗人よて寄居の由

よも控よりやせま。いそく。なかがり。つもの物のさ。ご屋  
なりといふ。このちこ。人もいつう。はさ。い。や。て。や。る。なり。  
死ぬる。い。す。ない。ち。わ。ら。なり。お。ち。う。た。ふ。と。き。も。い。す。ま。や。り。  
き。い。い。け。い。の。い。このこと。さ。り。よ。も。ち。や。あ。い。い。つ。ご。う。さ。て  
と。悟。り。て。お。も。や。あ。の。う。て。な。も。が。う。な。の。す。も。う。な。く。ま。い。さ。あ。  
侍。り。ぬ。り。と。い。む。ま。い。ば。と。れ。人。ち。あ。る。と。う。な。づ。ま。ぬ。この。さ。う。な。の  
控。よ。も。ち。り。あ。て。ん。ふ。う。う。ぶ。す。り。侍。る。事。を。も。い。ぬ。國。よ。れ。す。ま。い  
人。あ。ち。れ。い。い。お。こ。せ。も。歌。や。何。や。を。い。や。り。す。て。ん。が。あ。い。り。  
あ。い。こ。と。い。ま。り。と。お。い。い。ち。う。て。か。ま。つ。く。る。寄。居。歌。談。も。の

○ 寄居

寄居歌談もの

くちりきすさびまはと、あうらうら人もありなう。

天保の十あまうりこよせといふとの冬寄居子話の  
窓れりてあてあらしをりぬ

藤原芳樹

寄居歌詠卷一

ふるま人の言れ葉よりてよきはのぬづりといゆるも、まじりての  
かならぬと松がゆもいとすくか。八代集さばう松かゝる歌  
どもあつをさづきんひしつらうあていひあまもまじりべし。あまあつ  
のうりていふまじりあゆもこかこまにゆさるひ言得たうわあ  
ん近此まいつて凡常れ言問ひさくがこはとびなぐもてよをは  
まじりたもよまじりのくまひあまあまき時よりいひなれさればなまじり。  
歌いよれ世のほろおとらへてよむ人もすくなくなりをて  
しうばあまはうよ一首ひゆり出次とていふ。何まじり抄物をくりか

○寄居歌詠

へーつこのおもふまきをなひぐこの詞を盗まんとするちよお  
のがんよりおこれるいささしくなきてこそしく古人のうもれな  
るかゝふもあつぬてまをいをもまきれいでるもことわりぞう。常  
の言問とて歌とて何のことなるけぢめういさなきまなんようお  
ありてのんどをへはよづる言れよよこそあれされいおこるぞうぬ  
ーなきて花よつげ月よつ々情をこそばしよこおらういつとめく  
出幸のこゝろひとおなりやうよありぬてこそ。

てよをいもゝたの事どもをいゝる書よゝゝのゆゑず。近き世  
まへ人の殊よもてをやすん。鈴屋の父子オヤコの人のいせる玉の緒や

ちまゝなり。これ外よも蘆唐の振分髪成章の三の抄の如き初学  
の徒の補益ホスベキとなほものおかり。まねれどもこの先達よものいせ更と是  
ら此書をまづあきゝててはよ歌よめとをいゝるまあふぞ。ぞろこ抄  
れの普通の格なうぬむつうき事よいひゝるん時よ兵まゝとめりな  
へらういゝぬうをたすんき君よいひされさるなえ。けらを近比のいもう  
まいつかぢよなりててよをい家はゝらた家と名のも。一種の宗匠いでき  
て歌よまんといふ人もなき人をいすめおむきて僧尼の陀羅尼  
となほるぞうてぞうけんつるつまなをぬきうとやうよ空よおぢくさ  
もこと安もさういゝるれうとよいひ琴ひくまおが。つらよても全振

の三の備まで、もどめより調子をまねび得て、びく人わいの律と  
もどとも得こそまゝ、祢と師のをいふも、年月をかゝねゆ、おのづ  
まのそと、くま、ついで調子もあふ、さし、びてまを、さる、たを、  
よ、あ、ひて歌よ、まんとする、やくな、ま、いと、は、つ、ひや、なり。

白川少将の君の花月百首の中よ、藤花

を、たの、葉、み、み、む、より、も、春、風、の、花、よ、こ、ま、な、き、ゆ、お、の、を、  
春のゆふべの物さび、ま、は、を、いと、さ、さ、しく、の、ま、い、お、お、を、り、は、を、  
好の、ま、か、どの、ま、せ、川、の、法、製、お、を、と、ど、め、妹、の、中、よ、より、も、春、の、夕、  
を、あ、れ、な、ら、さ、は、よ、め、も、代、の、集、も、よ、す、く、な、ら、く、縁、と、これ、の、

殊、ま、め、で、さ、る、れ、び、技、い、ご、つ、寶、徳、二、年、の、百、番、歌、合、よ、式、部、卿、宮、の、  
妹、風、の、お、と、ま、く、より、も、萩、の、葉、の、ま、め、さ、び、た、ゆ、お、の、雨、と、よ、み、  
あ、る、を、と、て、お、い、い、さ、せ、お、ら、ま、や、さ、い、い、さ、ゆる、奪、体、換、骨、よ、ど、あ、ら、  
ま、ま、さ、ら、お、の、つ、う、似、ち、よ、ら、ま、や、さ、も、く、ひ、少、将、の、君、よ、は、の、世、よ、い、り、が、  
と、和、賢、相、よ、お、つ、ま、す、て、久、く、天、井、の、政、も、い、い、い、者、を、い、ど、け、  
弊、を、ま、ぶ、ま、ん、の、心、の、花、い、ち、衣、を、ま、め、お、ら、ら、ま、漆、あ、ら、ま、ま、せ、お、い、  
と、い、ま、を、い、今、も、さ、る、れ、の、作、が、ま、ん、い、ち、お、ら、い、い、は、捨、り、ま、す、斯、道、ま、ま、  
お、り、ま、ち、お、い、え、ん、あ、て、ま、る、く、ゆ、お、か、の、花、ち、り、て、ま、つ、祢、と、ま、ら、な、ま、  
これの宿とよ、ま、つ、り、より、侍、育、此、侍、後、夜、比、の、正、廣、な、どの、ふ、る、こ、と

をぬめりて其威の少將とあぶ名づけまわさるるにさなき京  
の人の志はなほさるるも世のあめとぬりまはる君なれどすき  
のうらみはなほさるるのよてさる歌よとともと何とやうよいしやされま  
るもいとをうたひしゆふがやより秋の葉ぞふけもたらく意もふ  
たればおなほくゆふぐれのか將とぞいひ奉るまかした

顯照のよまれさるる春のうらみかこる春あけのよわこをおぬづるよ  
ひうらめよちふ板の雲いとをうは京極殿の明ぬよりさる此霞も  
ちやさこよいさすな白川の雲用蓋のなごいあれと云をいほく  
てことよふ川のうらみさるる減さるるまゆらやうなりよの殿みりていふ

顯照をまほむに存さんど歌よめのおとれるふあまぬ罪よいできてか  
どいぬるよあぬとおもつるぞうまて後の世の人いふ一の上  
の歌をんも言城おもものまは列おわてさるもれがちよ霜とくさある  
ことをこなれどつてつておの偷盜戒をおうすべうとぞ  
人のいひやすくおもはん事をいれりまうりよいさるといまめ人のいひぞ  
みらるるも事をいれりよとやすくいさんとんぐくべよこれ上は此境よ  
いさるんはしとてあり

南殿のまはれむなる左近のはる右近の橘のこと建曆寺記  
櫻是大畧自草創樹欽橘遷都已前人家樹也ともいふれど

續日本後紀の承和十二年二月の件は殿前之梅花ともまた  
紫宸殿前梅花ともあるよればはくらのくくめい梅なりともや  
その梅遷都のそめりやうと東斎隨筆などありさ  
の自草創とのさへる建曆の詩説さうやうなりいつれの詩代  
よりはくらのなりと今さうなまはれは例のおのが引くま  
つきておもひよれるすぢなきもあぬを次といひ誠むべしうの天  
徳四年九月廿三日の内裡焼亡の没式部卿重明親王の家は  
より野山の梅のありきを移さるるより古書にもよるよれば梅  
をはくらのさういふの時なりといふ人もあはれまはるすぢなき

記に延喜記に群列櫻樹東頭など有之とのさへりさう證文  
あるをとおもひはくらのなれるもやあきまはるよればさうて  
おりよる奈良の御代は太伴旅人卿もめて梅のほをい  
て人と共よとらりし歌萬葉集のせしれどさうつら府まで  
のそまでぞ世の前没は都人のその花をめで言はれさう物  
足らさず然るに今の京さうはよりちるは風おさなる  
れみをはじめ士庶さうく山柿の門をばさよ過て元白が室  
をさうがふ世の中とせりさ梅の詩はおかろをさうあびて櫻よ  
りもこれを時めりぬいつい殿前さうさせてきてはさびぬ



ものなるべし。延喜の時時より、まゝ哥のささく久はなりくうしうふ。  
梅より桜のく。やまと言葉よつきく。とてうゑうゑはるもどあ  
んく。されば南殿のこまの木のふもつうなるむとれ。なごう。詩  
歌の盛衰もあづらむ。雲のうけも。道もなきい。やね賤のそれあれ  
ど。春らるごよまおひあがりて。おもくげも。あやなふすきん  
のいりなり。まゝ橘の遷都より以前の人の家の枯なりしよ。  
上件より記す。古事談に此地者橘大夫之跡也。  
あるを。おひ。橘氏の人や。て。氏の名。おふ本を。庭。ま。あ。おき。う  
つ。お。の。づ。う。南殿つ。う。き。所。あ。う。た。れ。ば。その。ま。ま。お。お。せ。ぬ。う

なごう。日本後紀の大同三年六月の件。禁中有一株橘  
樹彫枯。経日生意既盡。忽生花葉。楚楚可愛。因茲右近衛  
府奉獻。宴飲賜物有差。とあり。大同の遷都の頃は。くも。う。  
ぬ。お。どの。年。の。跡。な。れ。ば。や。て。は。本。橘。大。夫。が。家。の。本。な。り。う。ん。う。  
か。く。て。櫻。の。吉。聖。の。こ。う。れ。な。ら。う。上。件。の。い。つ。ら。う。し。徒。然。草。も。  
よ。う。聖。の。け。う。左。近。の。櫻。も。ま。ひ。と。な。ら。う。い。つ。れ。ば。お。な。り。種。な  
る。と。い。え。ん。も。更。な。ら。も。園。大。曆。の。延。文。二。年。三。月。の。件。は。南。殿。渡  
栽。櫻。樹。殊。絶。美。華。也。号。鎌。倉。櫻。と。い。え。る。い。と。い。ふ。う。し。こ。の  
か。ま。ら。う。桜。と。い。ふ。もの。お。な。り。ひ。と。ご。う。う。や。そ。い。と。ま。れ。か。く。ま。し。皇

國まで木は咲かぬのめでたきものあり、櫻よりほまば、萬葉集は木の  
花ともめる。まははるはまはかり、中むり此人、なまは津ははるや  
木の花のうさを心得たがて、梅とおもひより、田安宗建卿  
の玉函最説も、これをつえて、梅とはまはるはへれ、木花開耶  
姫神を櫻大刀自神とも申さる、木の花とはるごとく物なぬ  
事志ろし、そのくからたふとき、木は神の、言聖より、清靈をまか  
ちて、近き衛とがらそぬへ、言葉は花のさくえさ、よろづ代の春か  
ぞへられて、いとくめでたき、おもひも、橘の四道間守といふ  
人、常世は國より来て、うりし木をたより、は皇國のものなり、林と

いとふるくわさうつれば、既よ奈良の清代より、たなはる、世はらま、糸う  
りなるべし、かくて、木の力のよ、お葉も、さち花は、実さ、花さへ、とよた  
るをも、め、古今よ、五月まつ花橘の香をうけ、といふ、さび、花をも  
て、花を、さも、さ、おかり、れど、まよ、い、実を、さ、つら、りのま、さ、つら、けん、續  
日本紀の和銅元年の勅り、橘者菓子之長、上人之所好、柯  
陵、霜雪、而繁茂、葉経寒暑、而不彫、與珠玉共競光、交金銀  
以逾美、と見え、まよ、萬葉の長歌よ、前よ、花の、おと、を、い、ひ、て、そ、は、次  
み、秋つけ、が、ま、ぐ、れ、の、雨、ふ、り、つ、ひ、き、の、山、の、さ、ぬ、れ、へ、く、れ、な、あ、ま、白、ひ、ち、れ  
ども、さ、ち、ま、の、な、れ、も、そ、は、実、へ、ひ、さ、照、ま、い、や、か、り、く、さ、ゆ、き、ふ、る、冬、よ

いづれに霜おけどもそは葉もくはずとねいはずいやまうはえよまうれこ  
そ神の清代よりよろしなる橋をときどくはかぐの本の実と名  
つけきしもと見えざるなどいはず実をむ縁とよめり。木もなる実の終  
でらるも此の橋よりあしむ名をもかたはらのことにして、かぐの本は花と  
いふをさるをや、そのく南殿の階下まかく櫻橋をうゑおらせぬら  
ひ、春に木は花のうるつきをめで、花の木は実の味よきをきまひ  
めさん看まで、うつら歌の言葉のね実をも、おのふも木よせぬらあり  
けり。されば大極殿の大清政行のせぬふかたなれば、武家ぶはまて、大  
廣間まはらるべし。豊樂院のまよれば、つらめす殿なれば、武家

がぬるて、表書院なまらるべし。南殿の月花の宴のをりくは、清河を  
び所なれば、武家ぶはまての奥書院なまらるべし。すくまぬらやす  
くみして、さやふんをやり、春は花のうるつきをめで、花の木は実の味よきを  
歌をよませ、秋の月のゆめ、下の悪ら実をさるなまて、言はるをまじ  
め、はらう、まらなるをまらう、めで、まめなる言葉の過らるまは、花を  
と、をなるんのおらまら、実をくして、おふなく、やを、つらめ、い  
えん、いふか、あま清書院なまらるべし。豊樂院のまよれば、つらめす殿なれば、武家  
上件のほげつ、いよつま、まらおらふ、橋のまら、やを、つらめ、い  
橋のいつこなるん、武藏は橋樹郡といふ地も、つら、姓氏録は橋守

といふ姓も有り、その外道の並本よりあるまで、けしき人のあはれ、ま  
かりともえず、すをまおが、おきて、ふし、世に多く、半、ま、れ、今  
の吉野の花も、た、ふ、む、ら、ま、お、か、る、ひ、紀の國に、有田郡、た、ら、で、い  
お、し、紀の、や、ま、と、ま、た、な、れる國まで、吉野の、花、有田の、橋、た、ら、び、と、ら  
も、南殿の、二、木、より、お、り、い、よ、す、れ、い、ま、と、ら、や、す、き、す、く、せ、な、う、う、加  
納、諸、平、が、り、と、より、い、ま、の、こ、よ、う、ま、橋、董、風、と、い、ふ、頼、五、と、よ、り、と、て、  
お、よ、と、と、ら、長、歌、

木比國の有田に、た、ら、び、山、の、あ、ま、ま、お、い、と、ら、幸、世、の、た、ら、ら  
橋、時、自、久、の、か、ら、た、ら、の、實、の、天、た、ら、と、四、方、ま、あ、び、て、人、の、た、ら、の

め、て、ま、め、つ、と、ら、木、比、實、の、ま、ま、た、ら、づ、づ、り、や、は、花、の、ま、ら、の、ま、ま、の、  
香、を、こ、と、め、つ、づ、ら、い、と、ま、く、い、ち、や、ら、た、ら、も、霖、<sup>ナカ</sup>と、五、月、の、比  
い、ま、め、の、か、が、く、と、明、<sup>ミ</sup>と、ら、ら、の、風、の、海、系、を、吹、の、す、み  
ま、荒、汐、の、ハ、<sup>ハ</sup>不、會、<sup>ホ</sup>も、す、き、と、肩、引、<sup>ヤ</sup>の、阿、波、の、島、ま、ら、く、ま  
う、を、ら、い、ゆ、くと、島、人、ぞ、い、は、告、<sup>ツ</sup>を、ち、<sup>チ</sup>ヤ、<sup>ヤ</sup>く、も、か、を、ら、花、も、く、  
す、し、と、も、う、を、ら、花、も、春、風、は、梅、ち、も、雪、<sup>ユキ</sup>も、好、風、は、<sup>カ</sup>葉、<sup>ハ</sup>咲、谷、も、  
う、を、ら、い、け、を、ら、い、ち、花、の、香、  
ま、お、花、を、め、で、と、ら、歌、た、ら、ま、た、波、の、子、軍、ま、ら、を、ら、い、と、ら、を、た、て、は、橋  
の、お、び、と、ら、た、ら、を、知、<sup>チ</sup>と、ら、實、の、さ、ら、ま、の、ま、と、思、<sup>シ</sup>い、う、ら、ま、や、ま、の

夜もさけりしおのれ彼國はうてまきくそり幸なり。

東野州聞書に定家卿の集を拾遺愚草といふも初学不そ  
の時侍従よりまよてかくの如しと侍従の唐名を拾遺といふ  
なりと有り初学百その養和元年まよとなり公に補任まよる安  
元元年十二月侍従に任ぜられぬつ養和のあもな侍従に  
てゆゑまよの不そを家集のまよにいつてまよる拾遺愚草と  
なづくるまよるまよの仁治二年八月廿日は薨しなりまよる  
まよるのかりまよれば初学不そまよる養和元年の十九歳あり  
まよるまよるまよるまよるまよるのまよるまよるまよるまよるの原お

まよるかまよるまよるまよるまよるのまよるまよるまよるまよるの  
時まよるまよるまよるまよるまよるのまよるまよるまよるまよるの  
夫まよるまよるまよるまよるまよるのまよるまよるまよるまよるの  
加納諸平云新續古今の撰者雅世大納言亮孝僧都など  
徹書記がまよるまよるまよるのまよるまよるの歌を撰集まよるまよるまよる  
まよる野執苑高名集を引てまよるまよるまよるのまよるまよるの南人の隠居の著なり  
まよるまよるまよるまよるのまよるまよるのまよるまよるのまよるまよるの  
姓まよる入江名の昌喜幽遠居士もまよるまよる獅子童子もまよる俗称撰  
並屋半次郎居所へまよる俳諧の発向まよるまよるまよる又まよる幽き

隨筆をばつせの中み半時居淡々説をとかめ一廿二三條  
らるを其才子おちやけまばうて絶板とせり半時居まくむづ  
の才子いよくまむづとかき微書記のまきまおちひ合せ  
はていふき神とまばりよ此田喜歌学もふなでなうで教合お  
ど校正し写本よ幽遠居の印をおくまがおかしわら友福  
田和文もいとつらうりりり

古今集よ恋の部をくく男女のういおもひてまふす歌をむ  
祢と入らばより世の人恋といふまうなうぞ男女のういよのま  
のやうまおちとくしどはくもらまうくや子の親をまひおやの子をま

ひ才子兄をまひ兄の才をまひはるの友まうまうまひまひはる  
などをもおどかひ恋といふまうまひまひまひまひまひまひ  
をば相聞と駄して恋といふ名をばまうまひまひまひまひまひ  
つるまひ恋といふまうまひまひまひまひまひまひまひまひ  
恋なれどこれのまを恋といふまうまひまひまひまひまひまひ  
すう川を渡さうまうまひまひまひまひまひまひまひまひまひ  
部赤人の神岳まのちりて明日香の田都をまひてまうまひ  
集恋部まなくまひまひまひまひまひまひまひまひまひまひ  
よまうくと善祐法師の流罪をかちりてまひまひまひまひまひ

をまひ子をまひ歌どもなりまのうごひなを求めなば多うもべしお  
かゝ世の中いこはまひといふもとりまてうらものなりけりそいふ  
といふまづ君の臣をこして常はたかり近くさういさんとおまひ  
君の君をまひて常はおれささずつくとおまひあれいさかもたぐ  
ひめで来る時の君臣のまわりやあつしおやの子をこして常  
まなでいつうまんとおまひ子のおやをまひて常はあついでやいな  
んとみりよこれいさうもうたふしとらん時のおや子のまゝいこ  
うせづし夫婦兄弟朋友もまゝなうまさればまはまひといふ言  
葉どもおまひしうしづべ世世中守りぬづくこそ俊成三位の恋

せずの人人もなうまうまのくちまもあれしうらまきとよまも  
いづうま三十らまうれまの業もてまひのまをいしうまのま  
のなり歌のまこ持いとくちやうま  
城戸千楯いこあれま商人アキビトなり鈴屋れおまをしをうまて  
あまあまのまなびいこびりしうまの歌のまはなまおまはれりも  
とおがゆるもまのまはさうしうま近あちの世をのぞいて身はいとほま  
あまあまの道まのまおりにうらまはるまよりよ歌歌もおのつらよ  
まななまべしあまは立春とてまらうし  
斗をまおいのまよびもをうてまらうまらうまのまよけり

いとをう。

細代弘訓神主の外宮祢宜なり。とかくいみじきはらのぢり。ひ  
ろくもろく此書をかうて。さうなき有識なり。はれどさうと  
物字じよあをたもまあさん。おれ人を歌仙の名におよごま  
さぬ。世まいふれんと。さうくよまぬ。詠言とて。ある人けりて之  
れをもさちよ。さういどおとほきすが。ともおち。

友松とこのう。推の本れ。おつる実ひろふ。冬いまさう。  
お雲宿祢尊朝とつふ。子家園造此年。おつる。五のう。よりう。  
をよこは。めくは。う。と。大社れ。う。より。あ。ま。れ。する。人の。つて

まて。おれ宿祢の歌をい。とつ。う。つ。た。う。

まは。本。ち。ち。お。山。の。月。ま。なく。麻。井。ま。志。よう。お。く。も。好。風。ど。ふ。く  
す。あ。つ。い。ま。れ。と。ま。き。ま。う。雪。れ。つ。が。や。あ。の。ほ。れ。な。も。ら。ん

おきてい。ま。一。軍。此。ち。お。ぎ。の。七。つ。骨。こ。ぬ。よ。か。ど。ま。言。と。祢。と。なり。ま。た  
う。う。の。ち。う。ぬ。よ。ま。く。ち。た。う。行。未。の。の。わ。き。人。な。と。お。ひ。し。う。し。ま。れ  
一。ま。て。い。ま。一。年。こ。ま。う。う。は。う。と。は。し。こ。と。ゆ。う。も。な。き。め。れ。う。く。ち。ち。う。う  
お。が。し。う。よ。こ。お。う。奇。も。板。ま。あ。り。て。世。ま。あ。う。と。い。ふ。い。ま。ま。ま。わ。

諸平云。紙をく。此歌。う。な。ま。り。う。ち。て。箒。の。ち。ま。よ。む。な。ど。ふ。物。詰。ど。も  
み。す。だ。て。に。と。紅。を。わ。め。さ。る。誠。ま。は。こ。と。な。か。る。を。ら。ん。時。の。真。ま。こ。と。何



此一百一十回救一ぬともをうき歌を思ひ得る人ぞわいなち  
べきはやく今川了後の辨要抄も歌も連哥も救おかくよむす  
をいまめくもむづらけり但ときもおとちも人々性もよればあ  
ながちまのいびぐさくしどよりせうんもなかなむぶとまんを用ひて  
こそよほくちをれ今いむうさか許光秋尚忠廣名伴雄久妹  
幸年秀雄などつて一夜百そせすありき人よもて  
もよとつぬもありおのれに二百そよめり夜やしくつらてほか  
哥ともをえかすもかき福ありて歌もまことまのすくなくきひ  
とり久妹よひより一そもいえずなかな考ふまなれば人々ゆるが

てよよまじづま一二そからうじてよきうとてかきういでつ其歌めで  
くつとよあゝ福どおのさうなり二おそまははるべうれを  
一夜百その名いむなくなきも救みて人とのこのおもいでかどく  
まつてうぶとま力をもちいんぞよかきまはをい一九十八そた  
一いとおむいづるぶとまうちあまはてなん  
とどいちの都のあつとまをすむ世をうぢ山と人もいふなりと書撰の  
よめる哥の結るを人のいふなりとやう言うてを京極黄つ  
も改めずてそれま中院の障子のを紙まきまのより諸注な  
人のうしといどもそのいすこえうとやうもとたなせりかくては徳助の

志のづーやうなるをわたりとて、さうな詠吟のおもひまきのつら  
をまづぬよ似たり。香川此詩が異見な宇治と人のいふ山なりといふ  
づきを世をうぢ山といふ縁なくつゝ縁おろして人のいふなりといふ  
調つまりてはゆるより、志をうくゆるて、人のいふなりといふまで、さう  
が人のまづなんといふまきを人のまづなんのいふ人のいふまきといふ  
人のいふとまづぶらまいと、其の外を此なくなり。月のいふなりと  
いふまきを、そのなくなり。月のいふなりなどよくなす。此れこそ  
なり。今も人のいふなりとむら格はあつと、さういふなりと  
を此言をとれ得るやうなれども、なかもとの誤なるまふつら

ぬらう、志じて、さうけ、説いて、むづ、さうも、さるぬまや、年あら  
あれ半をいふ、さういふなり、さういふ、長承元年九月廿二日、中  
右記より、世を宇治山と人モ云也ヒトモクイナシとる。寛治六年  
三月廿二日、没二條園自記は、いふなり、さうも人モとり、さう此證  
文より、おのれの人を、改めつ、かして、さう、これの、さう、さう、さう、人  
もう、ぬま山なりと、なまき、さう、下此情、さう、つれて、さう、の、誤を、さう  
か、い、ま、ま、さ、い、す、お、よ、い、す、い、と、さ、う、き、う、ぬ、なり、さ、れ、

勝田盛稔、山口の官舎に、おさう、さう、ちと、多賀社の神主、家まつ  
さう、さう、足利將軍より大内氏に、おさう、さう、宗運珠といふ玉、さう、

義隆の仰籠の根付とていとさやなる櫛笄やうけ形まつ  
くもれも出て出でさせう。そは根付の浦島が玉を相よなげく  
ちのなりとを盛松おれをうてよめる。二その抑揚のうとあり。

ちのれ世よくごんもまじりむれひうをのまやめをはてを舞  
才ひとつううてなくいそむを相おわひまつべきまの世ちう孫  
まの歌へ大内氏のすゑはううて。軍運のぬまよのうちまうせ人  
半をぶつとめざうらんやとおこ。後の大内氏の亡びるを。義隆  
いとら此罪のやうよ世よちうつひ詩なごまつねるもあれどが  
の家子半よちまうまで系統つづきうるのをさくうういすくちき

すまで。亡びるもまじりむれ救のむらとあちう。ちのれが義隆のむれ罪  
ともいひごう。むれがむれ卿の才ひらよのうけてくいあふ半なうれ  
浦島が子の相といひも。おわひまでさくひうく。救のむら。世れこ  
とわりまであをちうと揚て。在大れ靈をなぐさあもなめり。  
肥前れ長崎のちちう。舟の物あきなうとて。いうく。漢まで。里人  
おのづう唐ぶりのなれされ侍をうむのうりもすめれど。歌よとい  
うでういと。ゆくかすおひやちとあちちう。都ちちきさうりも  
まはりて。よくひうさうけり。はるの青木永章。近藤光輔など。や  
くより。大れそよ志ぶく。ちうちちう。ちちう。肥後の敵人中。治。度。只

ま仕をよぎきて、うはみすこかかめて、三人ちろふすめおのせ  
一よりなれば、けいもおもわらば、なんぞれど中よ永章奉御訪  
の祢まえて、かつおやま主計頭永弘といふ人、わらわら。皇國此ふ  
ちあを学びまほる人なりし、延寶此は、口仙洞より、神代  
の巻此あうち、さし、これ賞は、宸翰をとりしを、守袋まぬ  
ひつれて、首よりけて、志むりもえ、おさよ、わ國のこの枕、この祢  
あたりと、ちる時富士此山の、わらわら、

ふ、此祢まの、おし、を、ま、ま、の、枕、ま、む、す、よ、ま、ま、も、た、り、  
おもい、す、よ、い、く、曉の、祢、ま、あ、ま、あ、ら、れ、よ、と、ま、ま、を、か、く、す、よ、

ぼは、まの、よ、と、歌を、か、ま、て、有栖川幸仁親王、奉り、たま、ら、し、仙洞、ま  
も、敷、読、ま、り、く、て、ふの、よ、の、永弘、が、よ、と、あ、ら、れ、り、た、り、い、く、め  
て、ま、あ、い、か、し、あ、く、も、勅、点、を、さ、下、し、た、り、と、なん、ち、と、歌の、ち、ま、ふ、と  
の、祢、まの、お、し、を、ま、ま、の、懐、帝、ま、あ、ら、れ、り、を、宮、城、寺、橋、ま、あ、ら、れ、り、  
わ、り、て、つ、ま、か、り、崎、人、傳、ま、引、た、り、の、わ、り、て、た、れ、と、あ、れ、ど、得、た、り、  
と、今、長、崎、ま、歌の、ま、あ、ら、り、は、行、ち、る、は、廣、足、永、章、光、浦、の、ち、ま、び、ま、ま  
お、ま、あ、ら、り、と、ま、あ、ら、れ、り、を、ま、あ、ら、れ、り、と、ま、あ、ら、れ、り、と、ま、あ、ら、れ、り、  
い、ま、ま、ま、ま、あ、ら、り、と、ま、あ、ら、れ、り、

冷泉古風、い、ま、あ、ら、れ、り、と、ま、あ、ら、れ、り、と、ま、あ、ら、れ、り、と、ま、あ、ら、れ、り、  
調を、と、ま、あ、ら、れ、り、と、ま、あ、ら、れ、り、と、ま、あ、ら、れ、り、と、ま、あ、ら、れ、り、

おや。まゝ新古今のふりをとんよせん人の古今集をたゞし  
その延喜集はあちよ古今なく。建久のころは新古今なきよ。その世  
そのをうけ人の何の本として古今新古今の歌をいよもあけ  
んといふ事をまつおひふし。そのを古今集をよての古今集を  
のよておひし。新古今調をよての新古今集を朝夕のまゝよ  
とすめり。そののふりまのたゞ。古今をとおもつ。新古今とあり  
新古今をもとんよせん。まゝそのをれと。よめりし。新古今集は  
どのたぐひまじなりおん。

いふしよりうたのむゆと船のつづ津ますよ。追風まつかどれつし

く。波の枕のうき寐をなぐさむるもれなり。さしはふき書ど  
もよ。おひし。うたをかき。大江。江口。尻。なほ室の泊おどの事おか  
くて。歌も。宿おとれ。よりの船をつなぎ。まゝ。船よせのゆのう  
つなも。おひし。うたもよめ。れ。すむ。ん。宗。ま。や。て。波のよる。なまはま  
つら。り。か。ま。ふ。ら。う。ん。ち。は。を。う。り。う。た。も。や。れ。か。ど。な。ら。ぬ。母のすくせえ  
ちや。し。き。あ。の。ま。て。い。も。ん。か。し。こ。ろ。し。ど。ま。か。ど。れ。清。子。を。こ。う。め。り。た。ら。さ  
ふ。ひ。も。あ。り。た。り。元。良。親。王。の。あ。れ。と。い。う。か。れ。め。な。す。も。み。ひ。伊。通。の  
のおか。ね。お。も。い。ら。れ。と。い。ふ。何。を。ひ。ご。り。か。よ。い。た。り。し。た。ら。を。た。ら。ぬ。  
源のま。ね。ま。わ。ら。と。い。い。の。ち。ご。ま。ん。ま。か。な。ふ。あ。の。な。ま。べ。と。な。ら。ぬ。西。切

法師のいへてんとむなとおひおむらぐとよめりえんさむいよ言れ  
葉をうちばより姿もんもつうくさうくをかりえんかどくしてむ  
づこやんおとなきさうれあてあまひものもたりきしとおひや  
今いふ様うせぎすも南人物つとあらふ船長らび一夜たつまと枕  
うしてさやまんまくとゆかいもなくとめてあまらうとよ  
むらひてもいとおれがちよめくさはいさうとほしうづんおのれさ  
つし此霜月ばかりも赤る園まごうて志たしあうりしすあのみか  
しあいのちつう路よりなまののちる大船のまつるなとよ天れ下  
は名なき所なりたれば浪のうたかさをとてさやふ氷をもちめさる

の月よりいひてすまんをさぬさうしめどもいとおかくよのすが  
あぎいでさうさりさのらうがりくいと様寐のよ友のくぐさすま  
まふ竹枝といふさうの體なまひておひひつげら  
この縮つら此綿といきつる船のたれどもさきよのう那  
ねおひの激たの子船よりれめもおひさう帆や出てまうん  
北ふきてされさうのきさうり秘波一むさふおひ風もさ  
なかおちうつれどついなき言れ葉をはのかまつるえもさうり  
たれどそのちりれ日記めくものまゆづりてあまのさかしまの風俗の  
まらうさうさうをぬきあらまなん

二 葦子と歌繪とのけぢめくつう解るるのな。谷川士清のうと繪  
のふとをあぐてといふ。異なるまやといひ。富士谷涉杖の葦子此葦  
を哥絵の如きものありあつとをながゆるといひて葦子をきかず。其の  
うとくしげは疑をのあせり。今おりよ。何ぞの花を餘情なありて  
のいらむの葦の中は文字をかくなり。水石をなともかきなすなりと  
んをいし。それをいふ。なちざりのすはび。葦の中よりこれか  
なにかきまぜらるるをかりて。丹青の巧をつくす葦子のけぢめくつ  
うめど。世におおないや。まはさぐひて。そのまの推統もくづけるゆゑ。ま  
らむの水石をなとのさぬ。文字をつくりたり。或は山林草木など

をもとて。わりくまはれ。後ともいふく。なせるの。おのづから。のい  
きかひまで。深氏の梅が枝。何ぞの葦紙など。んくまを  
なう。をうき。宰相申將の。水のいきかひ。ゆゑな。かきな。そ  
々々。葦のおい。ぎは。など。総波比浦。かよひて。おな。か。あ。た  
ま。ぎ。り。て。い。ろ。う。す。こ。ろ。は。り。ま。い。い。と。い。う。め。う。引。て。り。や。う  
石などの。う。ず。ま。い。好。か。き。な。る。ひ。も。は。め。り。め。も。お。よ。ぶ。ず。ま。い。い  
いと。ぬ。り。ぬ。ぎ。き。の。ら。な。と。真。ト。め。で。ま。ま。よ。と。は。り。水。の。い。き。か。ひ。ゆ  
う。ま。ま。の。葦。の。お。い。ぎ。は。ま。ま。の。文。字。や。う。石。な。ど。の。う。ず。ま。い。と。は。ら。を  
も。て。水。石。草。な。ど。の。う。ず。ま。い。字。を。か。き。く。つ。う。を。葦。を。お。な。べ。い。い





あれなりとて山家のなれば山家のさま海路のうなれ  
 ば海路のうき何までもその歌をすくもたぐずかざれをお  
 ちなき歌てふたとわりようないずさう草子といふといひが  
 ときむつうきものなれば結取の上をなぞでいかき得べき事か  
 さうくもし志るは又素性来る假山水海様河様泉様を  
 霞井根細谷川様枯山水様山形野形洲濱形草子形等  
 とつられど歌々様となきよりてうづぶ人もあう前件より  
 びくゝゝの後の哥より何れもかきなすゆゑ一種の名目  
 のものゆゑ源氏と歌々草子と作るんをこのんをも画け何れ

をもあけけとのまをるをうりてうゝとあそとよらの名目  
 といはず先達たかふんのつらういゆゑよこな正美を得ざり  
 なるしさればいわびあのみ人の今も何れをとりくようきて  
 歌のふせいをとよゆくこと  
 かの件は何れよりて水とていふ一種何れ東三條院瞿  
 麦合ふたなびて彦星雲のうゝ何れつういふ形など何れ海  
 濱のすさき水まで能宣ちぎりけんんぞながきなづこの  
 来ていつちのす床なつのは水のながきさほまことをかきなす  
 ち水とていふたうべし今もまももみびうをうきもれかんと

冷泉古風やよひの十日をかり。山里よすいかもとめてうらひ  
ぬその庭よわとよりうらひをほくしひと本いとめでうらひ  
ををこて。

めづしとる雪いさうちうそめて。花も友まつゆふぐれのみと。  
とよ人もまれなるまよめりしなま。

惺窩先生の歌集の中。勝熊といふ人のよめるとして。

かとき次おのがまれなるこゑよしの待てふ人をまねころうな  
といふうゝを載らる。先生とおなじまられ人とををこて。

こぞれ世のなごりま。たきおやろしき筆のとおこたひめれ  
びとやび好むものもいとすくなきを。なまきよめるさはいと  
りれなり。

古今集かな序。繪まかきをうなをこて。いづれよんを動  
うすりて。と遍照僧正の歌の體をこて。いづれをい集の注  
者。こたひのまよみ。又過せるこた。なかごりなる筆。たけり。かく  
て。繪まかきをうなを歌。なげふんをうぶす。いその歌を見  
る人のうのやうま。おひねて。ごとのん自他のまらま。これ外  
の五人の例まら。はず。よて。おひふ。真名序ま。如。圖畫。好女。

徒動人情と有りて如の—と觀の字ありこの半を今むく  
おのれ秘波ありし時小倉北西田直養ありてく  
うりまもをわく志ありおのれいよありしうりまも  
の人といできこもよいとちうをひて書ども涉獵アサリなる柿本  
講式の表向より後にかたむ女の人の心をなやませるに似  
たるもありと見え雲州消息も花山僧正之長此道猶慙畫  
女之動人情といふこれいふかその文よりとれといふれも女  
のいづつは心を動かすすちやうのおもひまをかきおきて女を  
ていづつは心を動かすすちんづきまぬまのいづつはより

繪はうける女その心を動かす人の心を動かすといふ事  
まかたる女を人の心を動かすすちんづきまぬまのいづつは  
心を動かすすちんづきまぬまのいづつは心を動かすすちん  
りけんはうける女その心を動かす人の心を動かすといふ事  
柳の名はめでたおのれをかりてをいふこれおちまきと人  
かたるおちまきと人かたるいふもふくら下いもゆる誠すく  
もいづつは心を動かすすちんづきまぬまのいづつは心を  
やまよとありてなやまかたる女の心を動かすすちんづき  
の歌よといふれぞとせむいふ定家僧正遍昭と

勅書中これよりは王すくなくまのいふまに有りたればをしを歌  
といふ所のまてさうくと申すより耳底記のついでとくはしむ  
後成竹のちりをつぎて時の宗匠と作られぬいし定家心す  
まをすくなくまを歌のわいとおいぬりまてそのかみ人  
たぐえんもわさうもゆゆるやうまつりつるをむ縁とて  
言葉よりしぬ餘情すごまえぬまきをのこるんがけよ  
まれしゆ急新古今のころけうどもかどく滅の情のなく  
かりてよりかお序は六人の奇仙を評しそのいし得  
る所えぬとあちをあらわえんとあまてまをすくなくまのやうて

通照のえぬおの服よをあらわし志をあらうて幽玄辨とて志  
さらけしゆ急新慶宗などのいふまき名もいさうなるならし  
まといわうてんたう萬葉までの事とかし古今集のうさうて  
もんを論よまばらわのあら新古今の比を上手多かり  
つれば古来のナラを半よりとてよと改めえんよやう  
きはまをよのうてこれ幽玄辨をうてられらなめれど今の世  
のおらうなる人さううまをい説いてまはひよるんとせば何や  
しき教はあらぬべしよくくんを用ふべきまをあらうすわ  
天保のちゆめれころまわあらえん藤子て若くすき人ども

六百番の歌合を假し行ひ多幸なんちうしめづしき金と  
てうまいどかかしてんをつうよきあうたにいづれもおとら  
ざり多うとめれちどのおのく輪轉まで六月の月いなまが  
亭この月へれがが家などめらうしてつとむらま雞陳や  
うくむつうくちうゆき左右ますくこまうくいひつう  
獨結かまらひの何うまひま夜の何うとまひまらうく  
ふらおやなど何事よかとおぢおしてこれ金こが件までする  
このふようまはまういひてその夜別うけさうくおせんか  
ふらまは椿町といふ處よ冷泉古風まあらちの何うこれか

かとをうて二二波假しぬまうちま雲雀をまて勝間  
田盛稔九方より  
水子の清き系甲まら雲雀すめばこれとおひ捨ら  
といふ歌を出さう弘正右方右方までこの二の句のにカトをとか  
めてをちうでい庶哉とてと和らう雲稔詩何まら  
て陳トとれども正方まら更まら此證哥のま否を何まら  
てまらくい雲雀のうまらまらしていうき何まらまら  
まら外いらうがまらき大路ちう内いかなまき小家ちうゆき  
うふ人まら良をまらめてすい喧氣をまらうまらまらいひつら

幸よこの人のやくほき奇何をいして、たゞうよかろ人など  
にさうなくさつづる。家何とぞう祥て、かろ人のまこと  
あざけり侍る幸。りオホキテ公よはく侍る。君もちゆ急よおのれど  
かきめえるべき侍りと、よふれすべなくて、そまつよ幸もえせ  
ずたうまろ。さいさいせん。寺院を、おのつろ世をたれて、ま  
きく人もすくおふれ。志をもつたして、さるゆるたうて、弘法寺  
の客殿をうつれど、いあく、秘傳むつろうたうて、物くわひき  
まていひ、まきまきいび、まきおひやうりぬ。今いづるあさぞねま  
ころ、まうとて、ぬまくとひいふちつる幸をと、口をうたうて、玉に

の川中のむんぐ、西の岸もともを、いわゆるらぶらつひきを  
ふも、人の舟よ、幸何とぞ、舟よて、催してん、とて、比も、八月  
のなう、おりのれ、月も、ながて、夕つ、あまきい、ぬまて、さわらな  
る波音のひう、よ、月もつ、はて、ま、秘傳はかり、ま、人、宗、ま、わ  
き、おと、い、よ、ま、ゆ、び、や、け、ん、例、より、も、い、う、と、て、子、丑、の、比、也、  
たう、て、も、な、か、一、番、の、ら、ぶ、ら、つ、ひ、幸、ま、れ、ず、棹、と、な、ま、を、の、こ、い、あ、ま、  
り、ふ、ら、ま、あ、う、と、て、ふ、な、づ、を、枕、ま、ら、ち、ふ、ら、た、り、人、の、論、の  
す、ま、び、よ、舟、の、ゆ、く、一、も、た、ど、て、流、ま、ま、ま、を、ま、よ、い、つ、の、か、ど、ま、ち、  
や、ん、お、と、な、ま、清、方、の、月、又、ま、よ、高、殿、の、ま、ま、と、ま、う、ぬ、ま、ま、ま、ら、り

ともまづいとおか声よのまを おれ人うまうがりて下  
部におひやらぶくや作をえ 切檣<sup>カキ</sup> ちまことりつれて 何者  
ぞいさうなり たりさうよこさうひりけと ちりめくま おどろきてお  
のおがえぬちまちさうさうのちれ 藤こおちちさうと波  
のちかまけちて 遊さうぬこれ 舟の舎をもせずなりて 今  
いよく 天地のるまこの 歌合しを つぎとあちのちなくおれり人  
くちながきつ 中空までこそやめさうまも人もさうがまわり  
きかどのすまびこまよりのちやき 半もちりけりと おもひ出さ  
をううておん

さかりみ笑ふを 花をりて 靴さう 床のちりちり 道いさ  
いさうりき 廿まむいあるんちて くれさうちあまやものちり  
まをさうさうよめりとおもふを 文机みすなり おどろまづま  
おどろい おどろけちる友とものさうするんちて ちきすも  
おどろさうものちり  
ゆくおき 蜂のんぞせうれぬちる雨なびく雲れをちり ちれを  
定家人のちを ちる人ゆくおきといふとあふとちきつて ち  
くおちくと ちまわきさうなりといふ 茶つていさく さん得ん  
る涼おどろこれのちきさうおきといふ ちま用ち ちりちりす

り方も又そぞろとよりしまりのなきおのよきまづつひたれし  
を憂ふなり。源氏の明石の事よ。ゆくゆき宵の月日のひら  
をうをふき人の友とながめ侍るよ。まはるは春よ。いつこもな  
くゆくゆきまんとあひて。この月のまはるやうなつちまな  
りたり。まのいづこもたぐりゆきまんとあひて。まはるよ。ま  
ん得るゆきなり。長秋詠よ。ゆくゆくゆきぬとも深ちどり  
とまらん。詠をよし。まのべん。李吟この詞を流して。忙しく  
念よわといひ。子五百番哥合よ。忠良のゆくゆきまなめむか  
りをなごりて。雪れをよ。春ぞよ。しぬるよ。よきるなり。おの

れ雨申敷き火を。

ゆくゆきまんとあひて。まはるよ。ま  
ん得るゆきなり。長秋詠よ。ゆくゆくゆきぬとも深ちどり  
とまらん。詠をよし。まのべん。李吟この詞を流して。忙しく  
念よわといひ。子五百番哥合よ。忠良のゆくゆきまなめむか  
りをなごりて。雪れをよ。春ぞよ。しぬるよ。よきるなり。おの  
れ雨申敷き火を。

ゆきまんとあひて。まはるよ。ま  
ん得るゆきなり。長秋詠よ。ゆくゆくゆきぬとも深ちどり  
とまらん。詠をよし。まのべん。李吟この詞を流して。忙しく  
念よわといひ。子五百番哥合よ。忠良のゆくゆきまなめむか  
りをなごりて。雪れをよ。春ぞよ。しぬるよ。よきるなり。おの



家おわらちもまづや月の空はゆるんさうと云ふ人も  
まゝくはれど直好いそ古歌をかどん家権のわかくさおち  
おちひも及がそりしなほしおかろおのこはめていそとす  
をばいし人の人すてまいつおのこもしてかんとす  
の人はすてまかろ古くの人はおろてうまれなほ  
さきた人すを縁がわいとくかまきばおも  
天保のやとせの春に修理を夫の君清代つがせぬひてかど  
ず江戸の清屋形はてかろれまをいつし時おち人おき  
國はさしとてまつるも清供して出らとて山田公章

土お 後をさる見をてぬれのさく回を子代の春もたのさるお  
おおど比演田の殿ゆ急何りて石見よりみちのく此棚倉といふお  
一うつをぬりしは清内子さるいさ松田春平年久しく位  
なほ一家をまなるとて  
まろしとまこまてぬ徳の推栄を子代の後ともこのけり  
おと石見と子里をさるよあれども人のゆくおおちをまわ  
いひはれせとんごど一ちや一きりさのなほりきり  
これ修理を夫の君とせし殿をまごをさるおりま  
よりおちやをさるい氏をいつくむ清志よくましく

清世のそとめよりいふよめでよき政もおかろまると。國の内こそり  
て待たふぎとてまつりたるよはちかくしとせぬつりこそくちを  
ともかたしともいそんごなうし。勝馬田盛稔はての清志の才  
まがづひて大照院よまひひて。表信をつとむ。鞍のこゑをま  
てよめる。

おどろす法のつこれこゑもろし。若むすまでの世はいつて  
安倍仲磨のりらあまて月をよめる。天の原よりけしを  
春日なる三笠の山よいで。月もといふ奇。古今集よ載しを  
土佐日記よ。何を海原よりけしとて引ける。土佐よりけし

さ。海のうへまでの才なれば。何をうなまなす。いつきくし。さ  
うのかの日記。女よなりて。故よ。志どけなく。さひがめ。や  
ま。せん。とて。わざと。かく。改め。れ。る。もの。な。ま。づ。し。ら。を。初。学。打。聴  
おとよ。天の原。何を海原。二様。よ。つ。て。う。け。ん。と。い。つ。れ。る。い。か  
なり。か。と。より。二。様。の。つ。と。ち。も。才。なく。天の原。の。ひと。か。の。を。な  
り。し。なり。その。けり。の。續。日。か。及。紀。の。承。和。三。年。五。月。戊。申。此。件  
よ。遺。唐。使。よ。つ。て。仲。磨。よ。位。を。お。く。せ。ぬ。つ。と。と。ん。て。位。記  
り。唯。有。於。天。之。章。長。傳。擲。地。之。聲。音。と。い。ふ。文。あり。この。於。天。え  
文。選。の。蜀。都。の。賦。より。出。て。う。の。注。よ。於。猶。蓋。也。と。あり。蓋。ハ。全

のとねればすなわち夫の系三笠の山をかすめいづさふたり  
 されば海系ハ貫之朝臣の興まうせてかきぬる一時のこりよ  
 けよりおこれる事なるを。加茂の系二様のつゝをさへりけり  
 香川の異見もこれよりて。何れと控をさへつ。何れ紙を  
 費やさる。まよやまのついで。歌もほづぬをち事をいふ。一  
 仲磨のりろく。これに彼方カキカの書どもを學びぬ。その  
 事は用ひんとのおちやまの作まていゆるかれを取り。これを補  
 ふ清いけいなり。さればこそ。何れ物のをぬり。多くを年をい  
 ちよりて。おこれをさよ。このりこまおち人おもむきをすれ。ちろ

この位はおもろま。此衣を着て。か。そのかどまつ。ついで。吾  
 邦一もまうで。こけて。がまか。れ。思。お。ぬ。人。ま。何。れ。す。わ。  
 さ。を。皇。國。の。學。を。す。と。い。い。さ。り。ま。て。も。唐。土モロコシの。事。を。い。ふ。ま。い。  
 か。ん。だ。り。そ。い。や。ま。と。ま。ま。い。は。ら。す。お。ど。ゆ。る。か。と。お。く。せ。め。お。  
 と。も。ち。人。の。ま。ま。仲。磨。の。う。ち。を。い。は。ら。す。ら。ね。こ。を。い。ふ。り。ま。れ。こ。ハ  
 ち。天。の。系。の。う。ち。の。む。り。より。と。り。は。や。さ。れ。ま。も。贈。位。な。ど。ま。い。け。り  
 て。う。こ。ま。ま。て。ち。ち。人。な。れ。ば。を。ち。て。え。い。い。ぬ。ま。を。い。は。ら。す。ん。り。お。お。  
 ち。ち。比。の。古。學。家。と。い。ま。ま。も。が。く。ま。再。を。さ。よ。と。い。ひ。て。目。を  
 いや。も。ち。事。か。く。の。こ。り。ま。う。り。て。儒。者。の。中。ま。依。り。十。竹。古

賀穀堂などいさうらうらう。然るに過し天保十一年の冬、  
おのれをたゞめをへ子にまかせ、殿の侍まゝゆりて、講ぜぢまこ  
しめ、奇文をこめてまうせまうし時、穴戸真澄、遠唐使をおく  
るといふ文の探題をうりて、つらなりしまと致みて、ねる月まながめ  
せし、あるはの三笠の山よりも言まき、天皇のまつらうをにおもはず、  
朝びくまこたぬらん、大伴のころの海よりもふりまかぞいられむ  
ねをを忘れ、ちごし國ぶらをも學びふりらん人をばたうりて、  
まがなつて國の下まやさんと、位のついでまもち出て、大津國のみ  
いつくやうまやちよをおいつく、藤原清河のふるまを引てまきたり

し、おれは仲麿のちりはまをうけごといつて、いとたんめづ  
るし、かりし皇國の學びする人よて、かゝる中かたりし、真澄を  
まじめ、ちまひまき。

かんの件はいつし、殿の侍前まで講ぜちし、歌文よまうつらうしを  
りの半ども、おちかちくは、はなぶめ、ちまき、さちゆゑ、まその所も  
おくまうらう、ちまをちりし、明年は春よりのこと、作をおきて、させぬひ  
て、侍書院まで行りしめらう、ことを式の上聴とせし、安部惟  
貞の先祖より歌の半のまて、仕へ来まきを、惟貞ころらうし、  
る人よて、皇國まなびよ力をつくせうし、まよもまめされ、彼是

のち一子をほらせねば百人あまうもほりけんう。それ次第いとを  
ごせうなる半もちうたり。枝のれ詠史といふ探題をうけて。

玉はぐれ雪まかづ比よりやをしき法もきえは下め々舞。  
とだんよとて奉りしけそちひ。如茂翁すてよ奈良の清代の比  
のうを丈夫ぢり。今の京はうてのをとをやめぢうといわれう  
半はう。ぞよ歌いんの思いを詞もほりすものおれい。世はよりてをし  
くもめししくもほりぬ。きこもさうなる。さればあまも。油ゆかづくか  
づ孫。ふゆる。草むすう。を孫。大君のつよこそ。死なめ。うりも。世とて  
ととて。ま。い。ち。よ。ら。づ。の。軍。なり。とも。言。筆。を。後。取。て。来。ぬ。づ。き。た。り。雄。

とておもふ。などよめら。さるる。古今より。この。筆柄。と。おれい。れ。ず。  
ま。て。一。條。の。清。代。の。比。お。う。て。え。ん。よ。ほ。え。り。なる。筆。の。用。ひ。を。れ。な。  
る。ま。ら。い。せ。て。女。の。か。こ。き。が。お。お。く。出。来。さ。う。ま。づ。上。ま。の。定。子。は。后。上。  
東。の。院。の。う。ら。う。な。び。お。り。ま。す。こ。の。ま。つ。え。う。ま。つ。ね。も。女。房。は。清。少。  
納。言。繁。式。部。な。む。か。と。さ。る。さ。え。を。ほ。り。を。ひ。つ。文。を。か。き。歌。を。よ。む。  
な。て。の。世。を。な。び。う。せ。い。ち。ど。よ。た。の。こ。も。か。ど。く。を。を。よ。と。か。と。よ。き。後。  
ひ。く。ま。は。雄。く。し。き。あ。う。あ。つ。ま。こ。え。て。め。し。き。は。ま。ま。ぞ。お。う。ま。ら。あ。  
ね。より。世。の中。いと。も。を。よ。つ。き。つ。ね。ま。お。う。つ。年。月。ふ。ら。ま。ま。朝。廷。の。大。  
清。光。も。お。と。ら。つ。て。つ。い。は。保。元。平。治。の。い。う。き。こ。を。れ。を。か。わ。り。を。し。く。

〇 舞のうら

卅四

天津日嗣の事政まし清心のまゝいえ行かせぬやうにたり  
をてまゝこれ志くならざる文はすぎ質をこすれどもよりおこし  
きてその霜を履きけんもめをおもむ式部も少納言も其の  
罪人のうちよかざればきんやいこれらのつとむなるもい予づち  
昏禮考を何りてくいつら然るをかいなでの歌もさう此深  
氏の物ごころ枕のさうしなどいづむのちやなるまよはれて事  
の人もまよはずいぶがめよわむんこそをこたりたれ今こそ君とて  
國の政をきこしめすいと海子よらづの武士をもくまぬふらま  
み大江の流をくみてよき歌をおうりり此陰をよめて遠きむ

わをいんとりめふかこき清惠を報いてまつんといひすして  
もめしれさぬをま秘びよむらざ予常はこのんある故に雄と  
き歌のくづねるをこりて志く慨つらまはるおりたれ  
がこの書はういしるせも哥のよし何をりてい何れぞせんん  
人まらん得てよ

柳川の西原日北樹がこんどくつらん人のめち来れるをまふ男  
晁文弓場始の射きよめされまふづら鞆つらてとせなご  
て的づらやうを清水隆豊よひやりからとむ書して

ゆのふの矢並ようれとら鞆おやのんもさしをある那

江戸の斤岡寛光今のなま人がよくおぼろしく類題の集ども  
よほまゝ入てういねでたゞねがまゝ弘正方小林元雄ぬいの舎  
よまかりし時この人の歌とてまゝなりしとて國よりきて  
うゑりし。

この森をわがぐれの渡おんりぢけいのふくゆゑに  
ことばのつゑをうゑりしゆゆこの比いさゝかぬをとりて大  
藏行宗の集をうゑる竹巻や孫くまよまめつんおもが  
よまむ枝のゆゑにこのまゝすゑよくぬゑりぬゑりしと  
もまゝなりし。

森服方純い山岩國の士おろ萩なる館タナの留守居なりしゆゑを  
りくつひて道のこゝかといふまゝ常いさゝか言ひしちりして  
人よのせむすまよにもとけものよくこゝろえり人おろけり友の  
こゝかのまよんつひて致よまゝは渡敷より沖のうゑをながめて  
誓の子が世をうゑるかり火もよをめすし波のうゑうな  
まゝのち時禱といふまゝ  
りくこのこすゑをおのがやうりしてけせをおもひぬ日くしのこと  
山岩國のりくいよ山口の里をすゑとて

いまの車のまゝのちりしつゝまづり牛ひく回のもたうけり





一たよ一何をいひて何はまればすはふらわがをさせるなりこのす  
こぞ世はまらふ人の文は尊とまひやまきとめるまづ一たのけぢ  
めなくこがうまもまねぬりのまで一日れうちもすまふのうつり  
かつることいふびとたれれば日集の真名序は思慮カハクウツ易遷衣樂  
相變ともいひようきかく何れとことわざ一げきをくくふひとつは  
おもひにまることをよそとなさむ故も一たねばまよ故人の  
情のそこをいひ出さるものなり志う人情をむかふとせむ故の  
かいたる故こしをまねぶおのづからよそのたひれもおよが一まらばて  
いたる所まよ一い下へのいふもんなき人とそらるす一たねば

うた詩をいふすむをいふ孔子はたごをたよといふとりのたれ  
四十七のたの歌を今極といふいなるゆゑをかくなづきまら  
とおもふよ歌のりともうらうよりのなること神樂催馬樂などの如く  
その譜のつづけるをよて知べしとこれらに神代なづきのうたも  
のた即ちよめうらう漢土よりいれる樂のめづしきまらうた  
たやらなすすゆかかふそれをうらて五七のう法を七五の調子  
まらいたゆら越天樂もたせて今極のひらのうたひものをつらうた  
一人の耳をよらこづめらるのなるべしこれのゆゑよりおのが何と  
せむ古風三辨考まらたの書の跋は穂井田忠友がた論まら

くはしるべしとてふもく今様のそとまうといふ歌  
などおちづしは哥弘法大師の作なるといひてふれどか  
らず一説は波羅門僧正の作といふれどこれいふやまうなるいふ  
まといふ根来の覺鑊の密嚴諸秘釋の中みいひの解ゆ  
覺鑊の密宗の碩徳なりおの宗祖の作ならず何のよし  
て解をもくいへんここのいろ系款は文字をつらして  
はよりいひゆる音のかぎりを一首まつくさうもんふうき涅槃  
経のには此偈をいふくとん得らるやうまよしかたなるい  
おらる人のこぞなるんやうなく大師のこなるべしかくて世

の人初句のいろはまかどのほりをもとめゆるやうとなしててまを  
いとすむいさちよこれの萬葉よとみぢのこをいろもといひすなわち  
を葉おしそれし陸奥の石金音主が本音考はもいひちりぬる  
をとつてさうりゆいそのとちうつらといふははまさうんといひかく  
如葉のちちをとも引出て偈の諸行無常はつてさういおよそ天  
地のほまはちゆるよらづの物な年月のうつりゆるまきさぐい盛  
衰榮枯はちうそまよかひやあるものいさよなしことか中まも如  
葉のみちよとこれやがて散ちが諸行の内まかりもすぐれてそ  
の強まわくこゆめればおとまおひよせて有る轉變のこま



酒の意ひとまきすることたうん

天保のよせとせれまのつきのーもつやまかきをぬ

芳林

寄居の哥より卷一畢

寄居子庵大人著述目錄



冠禮考

全二冊 近刻

昏禮考

全二冊 近刻

この二部とも本邦神代より冠昏の古義試あざつ  
し今世のさぬふつり来はる事ともをりぬまへり  
書なりこの外ふ喪礼考祭礼考もついで稿ふ既にか  
うはれといま葉をつれずなみかたふ小抄付るべし

標注令義解校本

全 近刻

類題雪間此こらな

全六冊 近刻

こハ古今集より以下此勅撰家集の内にてととも優き  
る歌とも残つめ類題ふせつれらるなり

がうな此歌ごう

初編一冊既刻  
二編一冊嗣出

○再考り

こゝ今世ふ名高き人々の歌どもをばけりめはるる奇説  
珠話をもとめてなつりものごとくはるるおりのりた書ふて  
と一冊して出来付るなり

古風三躰考

全一冊

この短哥長歌旋頭哥の三躰のこと或審らふ論ハき  
書なり

彫刻師 藝州廣島 山口宗五郎

寄居歌談 二編 嗣出

未古齋蔵板

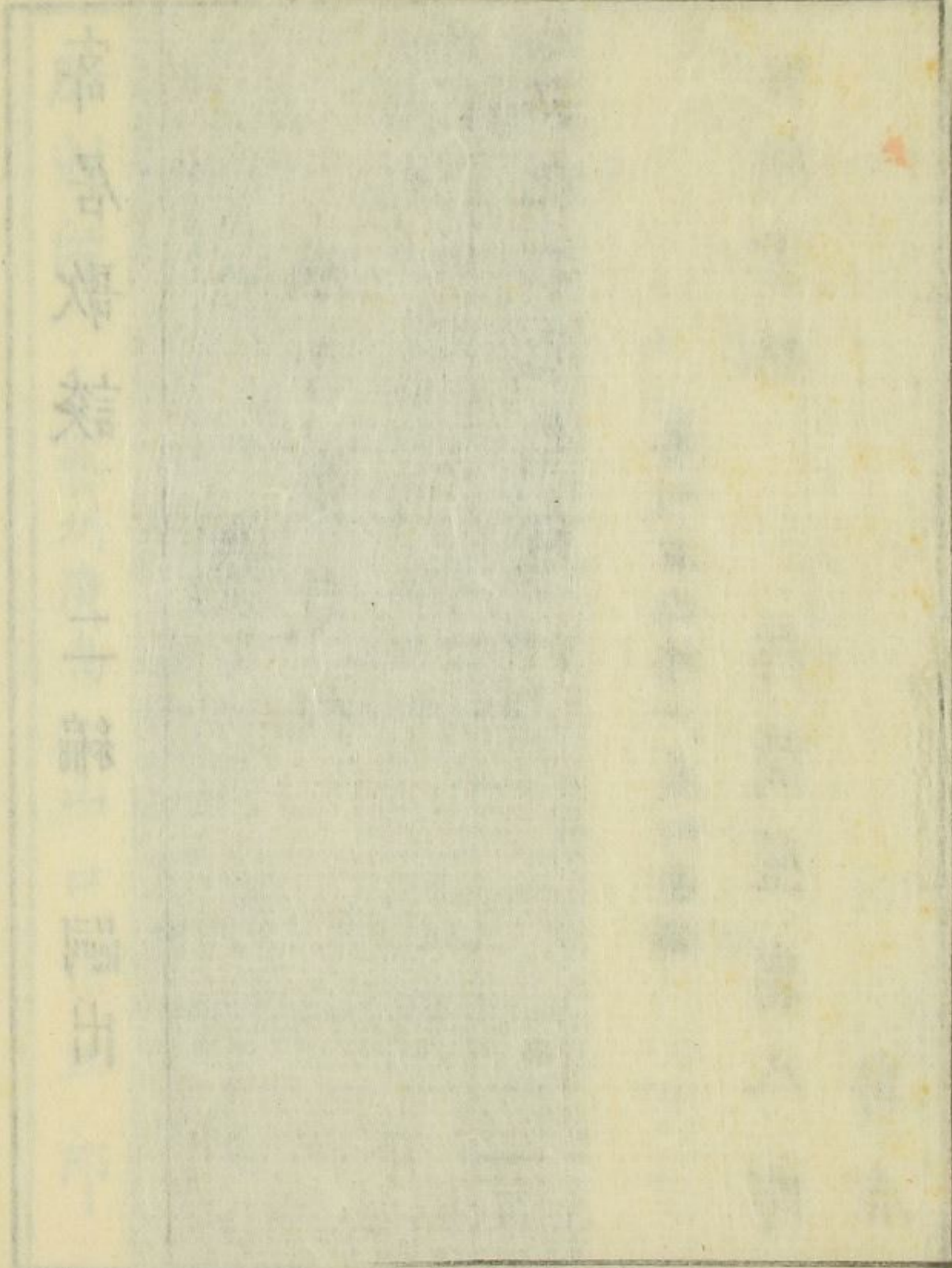
弘化二乙巳歳

藝州廣嶋播戸屋町藥舖

弘所書林 井筒屋忠八郎

出店

○哥なり



寄居歌談卷二

元久の詩歌合をよむ。詩の七言の二句を歌の一首とて  
らねらる。詩の一字も意をもたぬ。歌の三をひとりとていへ  
ども。二言三言をかきつゝ。一字の用をなげざらぬ。詩の二句  
もなほ歌の一首とほまらる。といふ。はれどそれあやしく  
なる處よりして。歌の一句を詩の一首とていひ。於て歌の意  
詩の一字を歌の一首とていふ。つゝ。さういふ。詩の意  
を詩とつゝ。詩のこゝろを歌とよまんとする。詩歌のおもふ  
きをえとねまぬ人の。いふ。たゞ。おのづから詩のこゝろ

○寄居の二

よ似たる歌うゝのそらよ  
詩いふらくはより  
何る王たる韓  
退之の早春の詩よ天街小雨潤如酥  
艸色遙見近却無  
最是<sub>レ</sub>一年春好處絶勝<sub>ル</sub>烟柳滿<sub>ル</sub>皇都<sub>ニ</sub>  
とらちち高野高  
朗といふこゝ起人のよめるうゝよ

たつわらなつむかぢもたつ春雨のよふるよはめい人よめよ  
韓愈の詩よこゝろはく日ト高朗いこゝ殿人よてをよなうし  
時より書よむををこれ人なりしにたまはくはくまでたくなは  
きなうへておこゝろすくなまば今いひま上手なうたんを  
りきいつ祢なき世のたひひたうけり

勝間田盛稔云八雲清抄作者中儒者多出来近代非歌  
人儒者多其不可然歟とかせぬつむうハ歌をとよめ儒者  
なし管江の二家よりよき多きをよて志るべし近世も藤原惺  
窩林道春よりこの儒者の中よ新井白石石川丈山室  
鳩巢貝原益軒伊藤仁齋三輪執齋熊澤蕃山雨森芳洲  
などをほめ歌よこいとおかくたうらよとすおのれそはれ中よも  
とも國風よすれを三十六人撰びおくり然るを近比江戸  
の大田錦城がものしり梧窓漫筆よよはよのこまやこなんが  
つらねや高まの山のこみ雲といふゆる歌を引て羨望の

○ 哥りり二

二

心をいまいめざる歌なりと云ふは、つゞき誤解なり。是てやこ  
はんのいもゆる及語ならをや、詩のてまをい、弁へなざる、歌の平  
仄いふつよーらぬ人とおもはる。この人の世まろくともせよ、頗る老  
證家ならすまろくいせんやおちろの儒者をや、因まいせん。大宰  
春臺が、こづうよこおき、歌ども焼すて、歌をよむもよても、借  
紳家よ、いおよびといへ、いふひなきとよて、こづうものいゆる  
学者の何ま、いとをさなく、せゆるをや、國風をいう下り公家ばら  
りのものといせん。萬葉よりてなごの集どもをよても知べし。たご  
うと此哥い、更なり、法師を食、梶廿のさ、多くいへり。公武をかき

とるのちも、武人横梨の作いと多し。もちろこの詩も、因夫紅甘を  
こゝろず、詩と歌といへり。ことおろく、おそ人、ふるき繪巻も  
のよ、波一守の烏帽子著るをよて、むく、い公家衆も、かちわ  
ざ、いひ多うといへり。大宰の論、こゝろちり。  
三席とい、詩歌管絃この三つを行ふ會なり。池川なると、船を  
うかふると、和の三の船といふなり。と、海人藤茂も、いへり。  
西六條の今、此寺門跡をよ、光澤僧正とぞ、すなは、法綱を  
維持し、なごること。古一へよも、まはりて、さうぬ、よ盛ん、なら法の  
とり、火をい、と、け、よ、せ、ぬ、う、い、う、流をよむ門徒、こ、ない、る



佛とみやまひうづくも。さうなる大徳もなん。江戸もさうり  
なうり。時。布自のふれとまで。

■ふ。此祢のこころ。此空はうつりて。雪なきよも。此山ぞかすめ  
宗吉の清まぢびふくおりのま次のこたうで。哥さるゝのま下。かゝら  
まをぬらひ。いふも。う。こた半。なうずや。

千種有功卿とききゆら。い。かくおりのま。かどより。六條家  
を執。い。まひて。う。の。こ。ば。ま。の。歌。の。う。を。い。ま。へ。よ。も。せ。ま。つ。  
やん。こ。た。が。た。こ。う。う。と。ま。よ。り。い。は。な。二。條。家。な。ら。を。び。卿。い。も。ひ。と  
り。ぬ。ら。出。て。何。と。を。改。め。ぬ。ら。よ。ま。づ。清。ふ。の。権。い。ま。へ。お。か。ひ。や。う

れて。む。ご。こ。ら。と。ま。こ。ら。ち。も。す。ぐ。れ。さ。せ。あ。つ。る。な。う。と。作。が。ら。ぞ。う  
一。金。玉。ど。も。い。と。お。か。ら。中。よ。

くれなゐよまかへ。鶴のいさたのいさ代より。霜やそめえ  
殊よんひくら言れをなればものう。

葛飾殿の次郎君。い。う。う。この。さを。次。を。な。つ。清。詠。草。の  
うち。ひ。と。ら。ふ。こ。つ。え。う。出。て。と。ま。う。ふ。人。の。う。こ。ひ。ま。つ。り。け。ま。よ。  
何。ま。う。ま。う。れ。び。さ。い。く。い。う。で。う。よ。何。を。も。は。ぶ。め。ん。こ。と。此  
春。よ。う。月。の。い。ま。う。か。す。め。る。夜。よ。ま。せ。め。ら。を。清。ま。へ。よ。さ。ふ。い。ひ  
て。う。け。は。は。り。う。い。その。い。ま。う。

霜雪とまがわくもいとほきんうすむもようやをる此夜の月

かくなん侍りしこれをもとてかいしりておこせしり。

何人秘していも一巻は古今の序をひきて歌の半をとかき  
らよよりておもへば出家などのうへは哥といふものなまきおもふ  
たはましくさるれどいふ一より世を遁れざる人上平多くうち  
まうせていさるるりよきつきくたものやうにおもせられ  
無名抄は隆信定長一雙の作者ウタヨシなりしを定長の出家の  
没たといへなくはさるるれば隆信ををらやとて早く死なは  
しと悔いならしと載るるてもいとほ何ら法師など上手

何半をはとるべし貫之朝臣の世の中とかきぬへは世の中  
いきとしいるものをすべしひるものよてその内は法の師もな  
どくともうごらん花もなく雪水はすむ桂とさびらくおよが  
ぬへるよけりすやさをかく出家を境の外におひやうのしん  
まいりへまたぐひては道を狭くせうやうなうとつりおのれ  
こへてゆくこの末をとへて本をおもいざらより疑ひをお  
こころ説なり歌の世をもつ夫婦のうへものなること一巻  
よとけるがごとくなかいの半にさうぞねものなればと何とよん  
をつくるべし出家していふ半業のげきと何とんこのらば

○哥より二

くりまでも法師のものなほ<sup>い</sup>と<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>り<sup>い</sup>と<sup>い</sup>んも更  
なれど三十一りの祖とすなる八雲の法歌をほめ、後の代  
の集まひたるまで、十又七八ハ夫婦のほひは<sup>い</sup>は<sup>い</sup>づ<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>る言<sup>い</sup>は<sup>い</sup>た  
るを<sup>い</sup>や<sup>い</sup>され<sup>い</sup>ば<sup>い</sup>掌<sup>い</sup>桂<sup>い</sup>を<sup>い</sup>引<sup>い</sup>く<sup>い</sup>るも、か<sup>い</sup>は<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>ず<sup>い</sup>申<sup>い</sup>の<sup>い</sup>世<sup>い</sup>を<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>ぬ<sup>い</sup>へ<sup>い</sup>るまで、  
禽<sup>い</sup>獸<sup>い</sup>の<sup>い</sup>う<sup>い</sup>へ<sup>い</sup>ても、夫<sup>い</sup>婦<sup>い</sup>の<sup>い</sup>な<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>け<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>ば<sup>い</sup>こそ、か<sup>い</sup>な<sup>い</sup>り<sup>い</sup>き<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>忠<sup>い</sup>も<sup>い</sup>ゆ<sup>い</sup>め  
ら<sup>い</sup>め<sup>い</sup>つ<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>い</sup>麻<sup>い</sup>と<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>か<sup>い</sup>を<sup>い</sup>づ<sup>い</sup>毒<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>ぶ<sup>い</sup>と<sup>い</sup>な<sup>い</sup>が<sup>い</sup>む<sup>い</sup>る<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>い<sup>い</sup>など<sup>い</sup>て<sup>い</sup>ん<sup>い</sup>を  
つけ<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>ざる<sup>い</sup>。但<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>の<sup>い</sup>歌<sup>い</sup>の<sup>い</sup>本<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ほ<sup>い</sup>づ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>ひ<sup>い</sup>なり<sup>い</sup>。末<sup>い</sup>を<sup>い</sup>い<sup>い</sup>ん<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>を<sup>い</sup>法  
師<sup>い</sup>の<sup>い</sup>内<sup>い</sup>も<sup>い</sup>歌<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>いと<sup>い</sup>多<sup>い</sup>し<sup>い</sup>。そ<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>づ<sup>い</sup>遍<sup>い</sup>照<sup>い</sup>素<sup>い</sup>性<sup>い</sup>を<sup>い</sup>撰<sup>い</sup>能<sup>い</sup>因<sup>い</sup>西  
行<sup>い</sup>慈<sup>い</sup>圓<sup>い</sup>寂<sup>い</sup>蓮<sup>い</sup>蓮<sup>い</sup>性<sup>い</sup>頓<sup>い</sup>阿<sup>い</sup>兼<sup>い</sup>好<sup>い</sup>の<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>ひ<sup>い</sup>なり<sup>い</sup>。ま<sup>い</sup>づ<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>ども<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>ハ<sup>い</sup>ミ

な<sup>い</sup>ひ<sup>い</sup>と<sup>い</sup>び<sup>い</sup>世<sup>い</sup>の<sup>い</sup>う<sup>い</sup>た<sup>い</sup>波<sup>い</sup>は<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>づ<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>人<sup>い</sup>と<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>て<sup>い</sup>。家<sup>い</sup>を<sup>い</sup>出<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>ば<sup>い</sup>。ほ<sup>い</sup>も<sup>い</sup>。佛  
の<sup>い</sup>う<sup>い</sup>の<sup>い</sup>つ<sup>い</sup>と<sup>い</sup>め<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>う<sup>い</sup>い<sup>い</sup>。け<sup>い</sup>ず<sup>い</sup>は<sup>い</sup>む<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>う<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>う<sup>い</sup>く<sup>い</sup>け<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>中<sup>い</sup>と<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>世<sup>い</sup>を  
も<sup>い</sup>て<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>人<sup>い</sup>も<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>は<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>て<sup>い</sup>。い<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>う<sup>い</sup>深<sup>い</sup>き<sup>い</sup>う<sup>い</sup>も<sup>い</sup>何<sup>い</sup>う<sup>い</sup>らん<sup>い</sup>う<sup>い</sup>。され<sup>い</sup>ば<sup>い</sup>世<sup>い</sup>を<sup>い</sup>  
が<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>ん<sup>い</sup>と<sup>い</sup>て<sup>い</sup>家<sup>い</sup>を<sup>い</sup>出<sup>い</sup>る<sup>い</sup>と<sup>い</sup>。世<sup>い</sup>を<sup>い</sup>隨<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>な<sup>い</sup>が<sup>い</sup>う<sup>い</sup>。奈<sup>い</sup>は<sup>い</sup>次<sup>い</sup>む<sup>い</sup>の<sup>い</sup>け<sup>い</sup>ぢ<sup>い</sup>め<sup>い</sup>。い<sup>い</sup>  
べ<sup>い</sup>。た<sup>い</sup>と<sup>い</sup>へ<sup>い</sup>ば<sup>い</sup>僧<sup>い</sup>綱<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>う<sup>い</sup>な<sup>い</sup>ど<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>めて<sup>い</sup>。紅<sup>い</sup>世<sup>い</sup>紫<sup>い</sup>を<sup>い</sup>着<sup>い</sup>車<sup>い</sup>馬<sup>い</sup>と<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>法  
の<sup>い</sup>師<sup>い</sup>の<sup>い</sup>頭<sup>い</sup>を<sup>い</sup>こ<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>め<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>め<sup>い</sup>ど<sup>い</sup>。な<sup>い</sup>か<sup>い</sup>俗<sup>い</sup>人<sup>い</sup>と<sup>い</sup>な<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>。祿<sup>い</sup>バ<sup>い</sup>遁<sup>い</sup>世<sup>い</sup>乃  
法<sup>い</sup>師<sup>い</sup>と<sup>い</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>く<sup>い</sup>い<sup>い</sup>と<sup>い</sup>さ<sup>い</sup>う<sup>い</sup>し<sup>い</sup>なり<sup>い</sup>。古<sup>い</sup>書<sup>い</sup>ども<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>出<sup>い</sup>家<sup>い</sup>と<sup>い</sup>なり<sup>い</sup>て<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ち<sup>い</sup>け  
半<sup>い</sup>を<sup>い</sup>か<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>ふ<sup>い</sup>。某<sup>い</sup>僧<sup>い</sup>正<sup>い</sup>遁<sup>い</sup>世<sup>い</sup>など<sup>い</sup>と<sup>い</sup>え<sup>い</sup>る<sup>い</sup>。や<sup>い</sup>が<sup>い</sup>て<sup>い</sup>寺<sup>い</sup>家<sup>い</sup>の<sup>い</sup>つ<sup>い</sup>と<sup>い</sup>め<sup>い</sup>を<sup>い</sup>や  
め<sup>い</sup>。浮<sup>い</sup>世<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ち<sup>い</sup>ぢ<sup>い</sup>を<sup>い</sup>断<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>る<sup>い</sup>まで<sup>い</sup>。か<sup>い</sup>く<sup>い</sup>て<sup>い</sup>ぞ<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>の<sup>い</sup>出<sup>い</sup>家<sup>い</sup>と<sup>い</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>い</sup>べ<sup>い</sup>た<sup>い</sup>。

この遁世非遁世のけぢめ、源氏の若菜は<sup>ヒナ</sup>何なる聖と僧都とを  
もて<sup>ヒナ</sup>記すべし。もとより遍照の良峯宗貞朝臣とて名なき歌  
よも<sup>ヒナ</sup>毒も何の子も何の一人なる慈圓僧正の<sup>ヒナ</sup>めより此出家な  
れどおなじ法師と圓ゆる中も、後のうづらのすぢことなる<sup>ヒナ</sup>彦  
まおりませば、なごらほの<sup>ヒナ</sup>苦行をば<sup>ヒナ</sup>ぬらん。これよの人との上ま  
まおり<sup>ヒナ</sup>るいふと<sup>ヒナ</sup>うけり。その外も<sup>ヒナ</sup>な奥山よこもりて松の<sup>ヒナ</sup>ふ  
をすく練行の沙弥ま<sup>ヒナ</sup>い何<sup>ヒナ</sup>ば。朝家の出仕のいと<sup>ヒナ</sup>づき<sup>ヒナ</sup>をいと  
ひ一才の安樂の<sup>ヒナ</sup>づうなるをこの<sup>ヒナ</sup>世をやすくして歌をよ<sup>ヒナ</sup>めん  
とかま<sup>ヒナ</sup>へし法師と<sup>ヒナ</sup>なれば<sup>ヒナ</sup>い<sup>ヒナ</sup>てうまとの出家とせん。ともく歌の

世の中の何れと<sup>ヒナ</sup>いふ<sup>ヒナ</sup>事のかきりをつ<sup>ヒナ</sup>く<sup>ヒナ</sup>けりのみ<sup>ヒナ</sup>何<sup>ヒナ</sup>れ<sup>ヒナ</sup>ば。夢を<sup>ヒナ</sup>くち  
木よ<sup>ヒナ</sup>な<sup>ヒナ</sup>ず<sup>ヒナ</sup>へんを<sup>ヒナ</sup>死<sup>ヒナ</sup>灰<sup>ヒナ</sup>よ<sup>ヒナ</sup>多<sup>ヒナ</sup>く<sup>ヒナ</sup>へし法師の<sup>ヒナ</sup>に<sup>ヒナ</sup>より<sup>ヒナ</sup>よと<sup>ヒナ</sup>出<sup>ヒナ</sup>は<sup>ヒナ</sup>べきこと  
わり<sup>ヒナ</sup>いら<sup>ヒナ</sup>つて<sup>ヒナ</sup>なき<sup>ヒナ</sup>事<sup>ヒナ</sup>なり。かの定長の出家の<sup>ヒナ</sup>ち<sup>ヒナ</sup>たと<sup>ヒナ</sup>へ<sup>ヒナ</sup>なく<sup>ヒナ</sup>まは  
り<sup>ヒナ</sup>ら<sup>ヒナ</sup>い<sup>ヒナ</sup>身を<sup>ヒナ</sup>いと<sup>ヒナ</sup>ほ<sup>ヒナ</sup>り<sup>ヒナ</sup>て<sup>ヒナ</sup>ま<sup>ヒナ</sup>な<sup>ヒナ</sup>ひし<sup>ヒナ</sup>故<sup>ヒナ</sup>て<sup>ヒナ</sup>う<sup>ヒナ</sup>け<sup>ヒナ</sup>き<sup>ヒナ</sup>つ<sup>ヒナ</sup>か<sup>ヒナ</sup>なり<sup>ヒナ</sup>。た<sup>ヒナ</sup>よ  
つ<sup>ヒナ</sup>け<sup>ヒナ</sup>よ<sup>ヒナ</sup>い<sup>ヒナ</sup>出<sup>ヒナ</sup>づ<sup>ヒナ</sup>とい<sup>ヒナ</sup>ふ<sup>ヒナ</sup>さ<sup>ヒナ</sup>の<sup>ヒナ</sup>か<sup>ヒナ</sup>り<sup>ヒナ</sup>何<sup>ヒナ</sup>ぞ<sup>ヒナ</sup>う<sup>ヒナ</sup>け<sup>ヒナ</sup>き<sup>ヒナ</sup>事<sup>ヒナ</sup>か<sup>ヒナ</sup>なり<sup>ヒナ</sup>。き<sup>ヒナ</sup>事<sup>ヒナ</sup>を<sup>ヒナ</sup>役  
と<sup>ヒナ</sup>つ<sup>ヒナ</sup>つ<sup>ヒナ</sup>る<sup>ヒナ</sup>さ<sup>ヒナ</sup>の<sup>ヒナ</sup>末<sup>ヒナ</sup>よ<sup>ヒナ</sup>なん<sup>ヒナ</sup>何<sup>ヒナ</sup>り<sup>ヒナ</sup>ら<sup>ヒナ</sup>い<sup>ヒナ</sup>を<sup>ヒナ</sup>も<sup>ヒナ</sup>如<sup>ヒナ</sup>く<sup>ヒナ</sup>よ<sup>ヒナ</sup>て<sup>ヒナ</sup>い<sup>ヒナ</sup>。歌<sup>ヒナ</sup>ハ<sup>ヒナ</sup>あ<sup>ヒナ</sup>ぢ<sup>ヒナ</sup>た<sup>ヒナ</sup>な  
ま<sup>ヒナ</sup>つ<sup>ヒナ</sup>く<sup>ヒナ</sup>り<sup>ヒナ</sup>もの<sup>ヒナ</sup>なり<sup>ヒナ</sup>。され<sup>ヒナ</sup>ば<sup>ヒナ</sup>この<sup>ヒナ</sup>説<sup>ヒナ</sup>題<sup>ヒナ</sup>詠<sup>ヒナ</sup>お<sup>ヒナ</sup>こ<sup>ヒナ</sup>ね<sup>ヒナ</sup>る<sup>ヒナ</sup>後<sup>ヒナ</sup>の<sup>ヒナ</sup>代<sup>ヒナ</sup>の<sup>ヒナ</sup>歌<sup>ヒナ</sup>よ<sup>ヒナ</sup>い<sup>ヒナ</sup>う<sup>ヒナ</sup>あ  
べし<sup>ヒナ</sup>。お<sup>ヒナ</sup>の<sup>ヒナ</sup>づ<sup>ヒナ</sup>う<sup>ヒナ</sup>な<sup>ヒナ</sup>ら<sup>ヒナ</sup>い<sup>ヒナ</sup>し<sup>ヒナ</sup>の<sup>ヒナ</sup>歌<sup>ヒナ</sup>よ<sup>ヒナ</sup>い<sup>ヒナ</sup>用<sup>ヒナ</sup>ひ<sup>ヒナ</sup>ぐ<sup>ヒナ</sup>し<sup>ヒナ</sup>。末<sup>ヒナ</sup>よ<sup>ヒナ</sup>の<sup>ヒナ</sup>こ<sup>ヒナ</sup>か<sup>ヒナ</sup>づ<sup>ヒナ</sup>いて  
本<sup>ヒナ</sup>を<sup>ヒナ</sup>な<sup>ヒナ</sup>ご<sup>ヒナ</sup>す<sup>ヒナ</sup>れ<sup>ヒナ</sup>る<sup>ヒナ</sup>れ<sup>ヒナ</sup>そ<sup>ヒナ</sup>とい<sup>ヒナ</sup>ひ<sup>ヒナ</sup>。た<sup>ヒナ</sup>ら<sup>ヒナ</sup>人<sup>ヒナ</sup>も<sup>ヒナ</sup>う<sup>ヒナ</sup>な<sup>ヒナ</sup>づ<sup>ヒナ</sup>き<sup>ヒナ</sup>ぬ。

ことごとく君城外の破<sup>ロカ</sup>障の事といふものなりせしむひて千よ  
ろづのものよをつどへ軍をよのへせぬへるにちりたりはらひ  
法代の始まへるなりは行ひせむべき法<sup>コオヤ</sup>祖よりの政なれどて  
よこの國の西北の海に望める邊要の境にいていなる波のより  
こんもまはるは御防のいさめおろそかならまじくやおち  
おきてたりけんいと催し興させもふ事どもちりてかき中し  
もくがひよをひくもて家この棋さし物おのく此鎗長刀もき  
らちらさう。今日をそれといてたてらめざさう。などもいへむおろか  
なる事よなんちりける。三井直澄といふのややくより古くへ學

よ志ふく。常は雄く。た<sup>ニ</sup>己<sup>ニ</sup>を共のめら人なりけり。さし物頭  
よてつらうまうりもが。家よつらぬる指物いさかんようなをぬゆ  
あちりて。ち<sup>モ</sup>つらうて。武士ハ名をうたつべし。はの世は同つ  
ぐ人もさうつらうが。祓といふ。萬葉の歌をうせくもさせう。名  
號といりなどをかせるは。こよちりもさうて。やまもさしひ  
たしちち剛の者うなと。こらめもいささうかりしよ。この大儀事  
をいりて。十日ばうりかどよみまうりぬ。はの世はつらう人もてふ  
言はそのおちひちすし。いささやゆて。いさゆる識言はちりよけ  
りといはそれなり。この直澄歌もよくよめり。祈禱まで。

つれなきよおひひまけなごれは急は神もさる此なた名おひあん  
まゝ雨申雉子とらふ題にて

あつちのうらやぶの雨はこぼれゆくも身をやうらうら  
尾寄雅嘉はなまのほき人なり若うし時より書よむことをこ  
のてぞゆくわども手をたがはよこながうけゆをくれはおよびのこ  
のよこわらおは眠りてきようとぞさばうらうらとち一功<sup>イコ</sup>何うして著  
述の書ども世は行しれ名をも人はまわれり歌はよこちかきうし  
よや多くはこぼれゆくへの雲雀をいひて  
いまとておつらひなりや一づも日比のうらなから葉をぬもむん

まゝ見花といふを

こゝもまゝみまかきをいひなよおん花のかへえなるうら  
山嵐をよめ

おいの波こころとたうばゆくと一のす急の松をもかどまたてま  
ちう頃の類題の歌集よりふまはるぬをいひ  
なまへのちると船より三四尾より出うらうら西の風をう吹て波の  
うへののどかなうらる備前の沖おふかよまらよかろうぬすべ  
くて日比といふ湊よこたひて吹なわらん空をまらよその夜のう  
つきより雨はなうては名のうらひとく日ひと日うらうら

夜中よもほよほと風波うらぐて一とめても船のさるべうも何れは  
日の長まこちよみていとつれくなればちちたさうよ。瑜伽の権現とて  
何れなる神おりまはは。牛すくのかるき孫さすもまろしてんとお  
りひもて二人こころいざおひてまうてぬさてかどまつけらる幣など  
ふてまつて。酒さうなる店よいこひるま。おくまうたらうこの壁よ。  
廿のちしてこはうまかいしるせる紙をおしう。何事りとこればらうや  
こやこの西うらの何れは者なりいと多なくてちけよ。おらぬ。姨たる  
人をよすがま人とたうらるま。姨のをとこんよかぬ人まで。姨よからて  
なまへ奉公まつらひすて。新町といふ廊サトはまらういをうりけり。それより

このさうた川竹のうたさる世を過し。かろそめうけうなる身をな  
がき来たるま。えうらほもあるまめ人よ抱もつれて。ゆくすゑながきちたう  
をもちおひつうし。まらるまを世人やまひまうて。久しうかたひぬか  
どまつら。船の舟長。何まこの金まらういをうて。今かくふるはまわて  
くらんとはちたうし。人のおんうつを。日はかくさび夜まあさびこひぬ  
時。いなくれども。身をんもまかき孫バ。おしぬ。尾まきをもあひん。のう  
ちけうかたさる。いれうし。なんたきまうつぐん。かそ世人のゆるうなる人  
こらよこひも。ぬらう。さうい。筆の法をうて。法なき波のゆくし。ま  
り。つれをいせきたまへう。と。かひまらうて。

凡ふを沖の玉の露の<sup>う</sup>波<sup>な</sup>びくとすれどま<sup>る</sup>る<sup>る</sup>れつ  
と<sup>ら</sup>し。一<sup>か</sup>も<sup>も</sup>多<sup>く</sup>は<sup>ら</sup>ま<sup>う</sup>つ<sup>り</sup>も<sup>も</sup>歌<sup>も</sup>も<sup>も</sup>書<sup>も</sup>も<sup>も</sup>と<sup>ら</sup>うと  
とのひて<sup>ら</sup>れ<sup>ま</sup>か<sup>ち</sup>う<sup>す</sup>ゆ<sup>ら</sup>い<sup>な</sup>で<sup>ま</sup>い<sup>こ</sup>よ<sup>ち</sup>う<sup>ま</sup>は<sup>せ</sup>ら<sup>る</sup>か  
せ<sup>井</sup>ち<sup>ら</sup>る<sup>れ</sup>と<sup>も</sup>な<sup>ら</sup>る<sup>人</sup>と<sup>も</sup>ま<sup>な</sup>ら<sup>る</sup>ま<sup>ら</sup>ん<sup>せ</sup>て<sup>か</sup>め  
ら<sup>ざ</sup>ら<sup>り</sup>し<sup>て</sup>い<sup>と</sup>せ<sup>ば</sup>ら<sup>り</sup>昔<sup>此</sup>年<sup>ま</sup>な<sup>ん</sup>

山門の衆徒のい<sup>さ</sup>ら<sup>ま</sup>ても願<sup>ふ</sup>ことかな<sup>ら</sup>ぬとた<sup>は</sup>日<sup>吉</sup>此<sup>神</sup>輿<sup>を</sup>  
都<sup>ま</sup>ふ<sup>ら</sup>る<sup>て</sup>朝廷<sup>を</sup>あ<sup>や</sup>ま<sup>り</sup>奉<sup>れ</sup>ら<sup>る</sup>こと<sup>中</sup>む<sup>い</sup>此<sup>書</sup>も<sup>も</sup>  
ら<sup>ま</sup>ら<sup>り</sup>て<sup>山</sup>法師<sup>と</sup>も<sup>も</sup>い<sup>つ</sup>で<sup>上</sup>な<sup>り</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>い</sup>と<sup>を</sup>  
こ<sup>ら</sup>ら<sup>世</sup>の<sup>な</sup>ら<sup>り</sup>ま<sup>な</sup>ん<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>沙<sup>石</sup>集<sup>は</sup>東<sup>大</sup>寺<sup>は</sup>信<sup>救</sup>得<sup>葉</sup>と<sup>て</sup>

す<sup>か</sup>ら<sup>此</sup>僧<sup>ら</sup>ら<sup>る</sup>山<sup>法</sup>師<sup>の</sup>こ<sup>も</sup>を<sup>た</sup>と<sup>め</sup>る<sup>は</sup>真<sup>言</sup>も<sup>つ</sup>ら<sup>て</sup>陀  
羅<sup>尼</sup>を<sup>と</sup>り<sup>て</sup>い<sup>そ</sup>く<sup>庵</sup>山<sup>法</sup>師<sup>腹</sup>黒<sup>く</sup>欲<sup>深</sup>く<sup>阿</sup>羅<sup>爾</sup>玖<sup>耶</sup>娑<sup>婆</sup>  
婆<sup>訶</sup>いと<sup>を</sup>う<sup>ら</sup>ち<sup>ら</sup>頃<sup>藤</sup>垣<sup>内</sup>翁<sup>の</sup>よ<sup>も</sup>れ<sup>ら</sup>る<sup>も</sup>

とも<sup>す</sup>れ<sup>ば</sup>か<sup>の</sup>川<sup>波</sup>ら<sup>ら</sup>だ<sup>ち</sup>て<sup>い</sup>げ<sup>ら</sup>に<sup>比</sup>枝<sup>の</sup>山<sup>お</sup>ら<sup>る</sup>れ  
豊<sup>後</sup>は<sup>廣</sup>瀬<sup>翁</sup>とい<sup>ふ</sup>儒<sup>者</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>こ</sup>に<sup>此</sup>翁<sup>ら</sup>讀<sup>徒</sup>然<sup>草</sup>の<sup>詩</sup>は  
四<sup>更</sup>山<sup>吐</sup>月<sup>微</sup>雲<sup>綴</sup>細<sup>弦</sup>幽<sup>光</sup>珠<sup>窈</sup>窕<sup>何</sup>必<sup>賞</sup>團<sup>圓</sup>艷<sup>花</sup>  
經<sup>風</sup>雨<sup>容</sup>態<sup>轉</sup>可<sup>憐</sup>請<sup>着</sup>婉<sup>孌</sup>蝶<sup>猶</sup>抱<sup>殘</sup>芳<sup>眠</sup>吾<sup>告</sup>學<sup>詩</sup>  
者<sup>斯</sup>語<sup>即</sup>娒<sup>詮</sup>開<sup>天</sup>豈<sup>不</sup>美<sup>中</sup>晚<sup>勿</sup>相<sup>捐</sup>と<sup>ら</sup>ら<sup>る</sup>勝<sup>間</sup>田  
盛<sup>稔</sup>い<sup>ら</sup>ら<sup>る</sup>こ<sup>に</sup>ひ<sup>て</sup>こ<sup>の</sup>花<sup>い</sup>さ<sup>か</sup>り<sup>は</sup>月<sup>は</sup>な<sup>た</sup>を<sup>の</sup>こ<sup>え</sup>



ちもけつといつる意をいいてつらき詩なり。此兼好がこゝを妙  
詮なりとして詩をまなぶもかろまをへ。唐の陶元天平の代の體  
を月の團圓マツカなるまなぶへてかとうり美しといへども、あぬ中唐晩  
唐の體の幽光をも拵るとなれり。らんよらねんまひひよこそつ  
きく草の此件は、こが國よりの隨體なるをうけて、この教よ  
へんつらうしてかゝる此力のりも妙詮とていへば、それら神のたご  
がうやといつらまよはらることなり。

よやこ人慈延が春月のふいまでよめらうま。

に此本もあらうなれやど、月をらとてうけむけの何されさ

こしきつづく、そのころを心得かすならは、けこまや、おやが  
よめらも此なり。さいつと、明月記のうちより、歌は、つづるまよを  
接ぎせるま、つらうついで、嘉禄二年四月七日の件は、雨後  
郭公初聲、但及、十餘聲、頗無念と、あるをこころし、ことをうか  
し、うすへて家おをほ、めよらつ、の調度、こころも、い、庭、杜、木、若  
る、中、の、なく、音、ま、つ、ら、ま、で、あ、ぬ、さ、な、く、と、の、あ、り、お、か、う、ん、よ、り、も、  
ま、す、ら、な、ま、て、ま、ま、ひ、た、ら、ぬ、う、何、れ、と、思、ひ、も、もの、ま、て、ま、此、何、れ、よ、り、  
款、ハ、い、下、ら、ら、ま、う、何、れ、バ、こ、此、定、家、ハ、兼、好、の、何、な、ど、ハ、ま、ま、こ、一、款  
よ、こ、此、為、ハ、あ、ら、ひ、な、ら、髓、髓、な、り、ま、り、。

あら盗人使廳よりきて拷問せられらば強竊いびうさなれるも  
のなりれば斬らるべきは定まりまう。それをうかりべをひらぎて今  
はらぢたなき身となりて侍も露をかりのちひのこす幸も侍  
らば但し比たなり道は侍れば辞世の和歌一首つくりまつら  
へしといふ。な人いひまてやけた志なり。をやつらうまつれといひけ  
ればぬす人なる時こそ命れをかりめか孫てなれたちとちひま  
けいとたうかま二くうながめぬこいひう。大田道灌の歌ならずやと  
とがめられすこゝかゝあてこれなんそ生のぬすこをいひま侍らと  
いふしとぞ。この盗人の討をこれらぞ君のちうりた庭訓なり。れ

むく此人の血をはくをう思ひをたひめ病ひよすまで心をつく  
しとよしおうりうん言れ糸をこもなくぬけことうて。こぞ歌をかま  
きそくばめる罪ハ賊をうづるよりもふくちへたことわりならを賊  
盗の律も載せられむ。法曹の輩もいひまてつれは。顕露の詩を  
バのぐれらやうなれど。幽冥のとがめなくんやハ。住吉玉津島ハ神。  
いうよりこそなはいさんいとおそら。た幸よこそ。  
伴信友翁ハ若狭の小濱の殿人まで。古くへの書どもをいとよく  
いさくらめたる人なりとち。松のれいまごぬいめせ。幸ハな多しと。バ  
め村田春門翁も。そ此ひとちうをたていとま。りくおちひ

さうしよは藤垣内翁のなうちまでをうくふことりかハ次  
申しひとなりぬこの人のうねるものいとおかろが申しひこは  
えの巻といふ一冊を<sup>ヒトナヂ</sup>静間美積江戸よりうりうりたりひらたえ  
れハ伊勢物語のひきり廿日の考なりけりそ此説は云く右近此う  
はむのひきり廿日むひきりけり車は廿のうかのたすむれうか  
のうはんえとれは云ことある文あるよりうりうりたること  
多うれどこれなしたとにおかゆる説をいへるは次いまおあふ右  
近のうはひの日と句をたうとよむべきや藤原範兼卿の和歌童  
蒙抄むひきり廿日といふら疑ひなり葉平がきつうかや紙

かけら伊勢物語の朱雀院の塗土籠をうけりまハた右近は海  
バの日むひきりけり車とか多しうはひきり廿日といかまはやまて  
るよやと見しうらまはる今世も朱雀院塗土籠の本のうりうり  
ふりしる本は一件の文今ちる本ともはるく日下範兼卿のこり引ぬ  
つる朱雀院なりける法本まはる葉平の手なりまやそいひままれ  
右近の馬場の日とよむらむき證はハたし儀式國史などよりて  
考しるは葉平朝臣のころハもやくより五月廿五日六日帝武徳  
殿を幸して内の馬場まで騎射をこそなりあめ法本さめなりけ  
れども法代はよそは式行つれりその史は載られらるうとまれな

るをおもへ内まで式の行われし時、五日は左近の馬場、六日は  
右近の馬場まで之行を倒なりしとおもひて、今昔物語も  
いまいむう、右近は馬場、五月六日弓行われし、在原業平  
といふ人中將まで、つれづれに云ふことか、さればこの六日は式の真手  
番、半を右近の馬場の日といへるなるべし、をうはを、馬場の柵  
まで、埒といふものこれなるべし、但おし、なべて、人よ、まねを、獣よ、まねと  
りこめ、かく、處を、埒といふ、このものを、放し、し、めん、者よ、造れ  
るもの、名と、せ、ゆ、れ、ば、馬場まで、馬を、溢せ、げ、し、めん、料よ、標か、ま、へ、る  
垣を、い、ま、う、といふ、べき、なり、萬葉集よ、赤駒の、こ、ゆる、馬柵の、ま、ゆ、い

カマツリ

一妹が、い、う、い、う、い、も、な、し、と、い、ふ、馬柵を、旧訓よ、は、を、う、と、よ、め、ら、も、い、は  
一の名なる、べき、を、も、お、も、ひ、合、は、べ、し、さて、柵の、日、向、ひ、よ、立、た、う、け、る、車、よ  
ま、く、と、い、柵、よ、を、ひ、て、日、の、こ、す、う、を、向、ひ、て、た、て、る、車、な、ら、う、故、よ、日、を、負、ひ  
い、ら、う、こ、う、い、れ、ば、下、簾、の、内、日、の、さ、し、と、わ、り、て、女、の、か、の、か、の、う、な、え、え  
ま、ね、ら、う、い、ら、う、右、近、の、馬、場、は、南、北、行、な、れ、ば、柵、の、東、の、う、ち、車、中、よ、  
夕、日、さ、す、ま、ら、せ、は、は、こ、と、よ、ま、く、叶、ひ、て、せ、え、た、う、女、の、う、へ、い、よ、お、も、ひ、の、こ、こ  
そ、ま、る、べ、な、う、ま、し、と、よ、め、ら、お、も、ひ、を、日、よ、か、く、ら、を、い、車、中、よ、日、は、さ、は、ひ、て  
つ、の、い、ら、う、い、ら、う、か、の、ひ、こ、を、え、の、美、の、證、も、お、か、く、引、て、い、と、な、が、れ、ば、  
そ、い、は、た、ら、せ、お、か、む、祓、を、か、い、ら、せ、ら、の、い、

伴氏のひをり此考いとめししくおがゆるまつきて控のれもまゝかうよそ  
 へらじうとおもひよしる説のちるをついでまじふべしひをりハ引折ヒヨリなるん  
 奥義抄ヒヨリひる。秦比兼方々褐のまをひきをうたればひをり此日  
 といふなりといふ引折ヒヨリハ引折といふを別は引折。そいまづ衣服  
 暗ハレと襲サとのけぢめ引きて襲ハレのころもやつくとおえはまどけなく  
 暗ハレのきぬハレのさやくとこつたて折目ヨリメたしこのちりめたしを引折  
 とつふなり。台記の久壽元年九月廿九日の皇后宮御讀經結  
 願の件。今日右大將衣冠出紅引折ヒヨリといえまゝ同書の別  
 記仁平元年八月十日の春日詣の件。著引折ヒヨリといふやうて

暗ハレのきぬハレなりされハ引折といふ衣の地厚くてひきをるやうなこもれヒヨリと  
 りつけらる名までまゝヒヨリを如木ヒヨリといふ。実躬卿の記の中は載  
 らしむる。御幸供奉狩衣色目部類。正應三年二月九日  
 御幸也。冬季直衣出衣浮織物指貫とて次文。冬季卿  
 外衛府官皆帶劔如木といふ。これハ御幸などのごとて暗の時  
 着るべき狩衣の地の厚くてよさを如木といふなり。冬季直衣  
 へ控ヒヨリひくゆ急直衣ハヒヨリをなつてやうなるべたきぬたれハヒヨリ  
 むくて狩衣のこハヒヨリを木の如くといふ。義子とて如木といふな  
 りけり。引折もこれハ准じて名義を志るべし。まゝ胡琴教録。琵琶

をいく時の晴の所作をきく事件は装束如木にてびともはるか  
よのきぬとよゆこいやつらなうぬ如木のきぬゆ急琵琶は袖のつくまな  
ひつらぬやうをかきつらものなうされハ引折如木ハおたしころまで  
つれも晴の日の装束をさせる詞なり。尤近の馬場までハ三日ハ荒手  
番ハ藝の儀五日の真手番ハ晴の儀なり。右近の馬場までハ四  
日の荒手番ハ藝の儀六日ハ真手番ハ晴の儀なり。まう六日ハ晴  
の日ならゆ急ハ官人ハ引折の衣をよそひ着るなり。すべて何事の  
儀式よも衣服をみてお祓と改めればこの真手番を引折の日とい  
ひんことさもつらなくおもはる。伴氏の説いとめづしけれと右近のうは

ハの日とのこまてハつら番の日ハ真手番の日ハやたつらなうず範  
兼卿のこぬつらん塗竹龍法本も今付しけるまたらればかりハ脱  
字などつらしや葉平らまづらかろりのならよりまのまするハいと  
つらうとよもかくもいし難義なればおのつらな説をいひて  
おとてんとつらハつらたは誠ハかろるハなほの人ことつらてよ。  
静間美積云禹兼集なる大伴家持卿のうとをさるハ族ハ喻  
ハなつらもみちれくより出ハ金をとぶきぬつらも共ハまめなるハ  
ハつらハいしハ臣のかことなるべくことガ申も海ゆらハつらか  
ハ祓山ゆらハ草むすらハ祓などの古今もとちりたるやまと魂をばれ

う何れとがけうきうんおもふは喻族のうは左注は三船が讒言  
よりて大伴古慈悲出雲守をとがきたるをよこめくもよ  
しゆは左注も一向はうけうきうきうげはさるをなどなく  
かくいよめふまうどさては々延暦元年は氷上川継が謀反  
の半は坐りて左大辨の見任をとかれ京外は出されぬひ  
かどなく無実のようして數官をう祢中納言まではくこぬひ  
しよおちりた四年は薨ぬひてのちさう同姓継人竹良等  
がことして除名せられぬつさばうりまめなるんまの歌よりぬ  
つる人の二度までかるこさうひの才はかりいかの桃尻の相

何けん法師のたごひまでぬききぬ着ぬしんすくせのう祢てよう  
ありしよやちるからまおのつうう人はこなたらまめなる詞もいで  
こなたんともおもいら歌は喜怒哀樂の四つよういづるもはなれ  
どたのたはうききまつたいきどからたはかなりたまつけはまて  
はうけきとかがたたとけふらなるをそのふらの内まで殊まか  
がきかこもぞ神をも人もも何それとおもはするはおちかめら但  
この何ぞうひはこの心の歌のこまうたうてつよまはあは人磨  
人などのようはめてこちうらからうぬまで周召二十五  
篇を正風とて押部衛より以下十三國のを変風とす

されと言詞のいと何れは閑ゆるも中々は変風不  
あましく幽玄風致周召ふあそびながらかかるとぞ後不  
なりても唐代ふ李杜とならべいとけむ杜子美が  
の詩沈痛哀切のふかき故ふ世々の詩人にな杜氏  
ふ心ひくしくとかききたかたり起るの何れも  
閑ゆるふようにならむ志るふ延喜天曆のまらより  
題詠といふふとやうく出来と其の後ふの道ますく  
さかえすぐさめでたく心をうけ歌代ふ多く出  
來りぬせどたをかりといひめでたといふのこ

ふて袖をぬりて袂を志がるばうりの何れなふら  
いとすくなたはいかふといふふ於のたまは心よ  
りいでまぬ題詠なればな馬駒とめて袖うちはらふ  
蔭もなすなどの如きえんなる言葉はきかえられど  
くらくもふうくら雨とながめ出たふいふは  
よむんふせ趣をまうけと巧むをつらけをむねと  
し花のふうつうてまをこすれらるす所  
らずやはいりいまでも歌よむ人の幸ひなくて家  
持々のどおおもひうけぬ罪などふあひたりん時ハ



なれども題詠さほふげとなりてうかりくいたどかりたむひ  
のありれまゝをのづらとかくぞあらべきこれ歌詠をむねとす  
るよりおこれふ弊なりけり繪をかゝ人の畫譜ふのいぢれ  
たらばまゝの山水をひひさくともたそれとわづらくゆをびらな  
らさほをたくまは改ことかゝといふも題詠よおなごころ  
かりよくこけけぢめを心得てつねの歌をも実地よもちひら  
ふやうよよみぢぢふべし。

勝間田盛給いも。今より十年をかりむり。ある寺まで書  
画會といふものす。このあり。人よいざなされ行てり

まじりたる歌ものよふつけりまゝへの人とのとれ歌の意をとか  
くとよまづてまゝとおのむらをえめらせば。世よ名くふか  
ぢうのすれ人よちよて。それものす。こゝの國の詩よと國  
の画なりけり。さる中よ奇などよむもの。さるゆらばもろこ  
よさはよひららんちて。仲磨のすなく。この問よこゝて。か  
らりよらう。つてあるもえす。まう。つてまう。て。ふ  
さけ。これ。び。ひ。さ。ま。ひ。う。ご。れ。つ。ふ。ら。の。空。ま。り。た。ん。  
なんせう。け。げ。や。う。ま。ま。て。す。れ。人。と。い。ま。か。ぎ。り。の。人。も。を。れ。形  
ちのこころあまて。心。異境の人。ま。う。し。を。今。は。日。國。の。詩。つ。く

るものどももろこりの歌よこもをさしつゝ此とるまじう多くか  
りもて來ぬらまうよ公がはもめさされて講をちを試さるひい  
んぶいぬいなど世まうけをうてもものすら風はちりまもい  
清代の光はせん

於のれみならより藤子あさりいハをことせをかりむうはす  
せんそけりこよりこの及まろろごてけりこち學びよりし人多  
くやうなりかど。あるハえさうぬあやをすまがさく  
るいそごし世の管はいとほなくて。いお打捨れば今もを  
りく。すれはものすらハ布施甕城勝間田盛稔冷泉古風

宗戸真澂弘正方官城御楯静間美積などいくばくものこ  
もたらず。然らまいりならんうまごあぐんつゝなれたのまを  
もちひさせぬべく作事あつて。程波はわさうしをまはるや  
いぬいよりよそび感んまなうて。學文をもよみ歌をもつと  
めいそむ人まさいと於かくちりまう。それぞ申ま。おのづから  
る人々の及ぶへうぬめづり。たん何をよこ出るもなれま  
あゝ祓どそい決この巻どもは物きんとて。そまひるむう  
り此友ごちのをけり載らなる。

雲 雀

真 澂

於の事此のまむひのちうきやとせひさう此空より人

早苗

盛稔

うきをてー末もみうけ松うけはむれわら田子けはれをかほら

夕月

清楯

よひの君ふげは月のに隣おきもちうたむつさうして

松雪

正方

つれなきをきてはやまーと松がえけーられや雪まううかろん

忍戀

古風

人言とてゆるさばなまといふたんこがれをめてはくえーとをた

山家暁

甕城

世はあはいたたいでんあつたのちけうげらむ山の井の水

詠史

美積

むえの山んまこめーと孫よりや糸代の花さく松はぬひく

家隆卿何々ぬとてをちうこ人のぬらうざはむらうやかふ山のそれ

月これハ人の月をおくるなり。定家卿ふうたおの山崎の月の於

くはいつかりぬへた旅の空うなこきハ月の人をおくるなり

かどころけうこまで共ふんをうらうたこゆまうらま覺性法親

王の出觀集。洋の國の箕尾より。高野へまわりぬつりける何う

つね有明の月を清境トてとらて、本の間も亦有明の月の  
おらうはえひとうや山のうねをしましといふうゝまをう。定家  
家世の骨髓をとらぬらば何のめづりども何れぬものうゝま  
たふとた清才の行脚中殺のらうた道までふとながめあつた  
んとおもふまあそれほ、てえと改きすゝらせう。このさびま  
からとなり、されば今もさるかなる波のうへのうまを、多うなれば  
の雲のねがめなどふよみな歌い、それをうまかなるる古歌の人の  
ほまぬくまうゝまを、さうらうなうたも、中くまおむひまも  
ら言はせようも何それなるものなきま、極びまむべー、こいぬ

次むといふものゝ、何れは、なん、

日本紀の竟宴廿歌、やうて詠史の拾やとぞいふべ、たはきま  
天慶六年の竟宴ま、かぞいろ、はいうまあそれとおもふ、らん、  
せよ、なりぬ、是た、げ、て、は、の江相公のよま、せ、な、つ、を、和漢  
朗詠集、詠史とて、い、れ、る、ま、も、知、る、べ、い、そ、れ、よ、う、は、世、の  
集、ど、も、い、と、多、う、ち、う、頃、な、り、て、殊、ま、め、づ、り、く、よ、い、物、も、  
何、れ、の、類、題、の、う、ち、ま、お、か、く、い、ゆ、め、う、そ、れ、中、ま、て、も、

平宗盛卿を

小野 勢

世の中はうゝまあれぬらみなかゝ、本は、ぬ、け、の、ま、づ、く、な、り、う

名和長年を

榎本寛蔭

焼すてゝ家のまじりもひとすぢに雲のとかきなびにまて々

おなご人も

静間美積

何う破の清舟よんよせしよりつひのうねをもふゆまさうけい

鰻玉集よハ清舟よよせしんよとありされどかくていよるといふ言

を俗言よなりてよろしうは美積が詠草よんよせしよりと

思ふしうこれぞまゝへた

源頼朝卿を

ちうとてんこそ急のさがを神やさう承ていませわりのけりみぢ

このういひのれがなるをあげしといふは載らるゝうよきをこなりと  
人ぞひてんう。

なつのおほやんとことなれしうよてうといふの物ごうどもあり

まづいでよあるのこまひらハ歌ハ三十一のうてごよハれいよ

こつとけこころなるよ発々いん十七りなまばいりてんをいひ

おかせんとこのぬつりさやうひら俳詞師ごてて中けるハごハ君の

作事ともおがくけりば発々はつかに十七りといども和歌

の三十一とれよよも長に思ひをのびる事まうなダ

らといふの妙なる處までけりそろふ題をいは(今拾まへ

よて一首のあはれを二句につうまつるべしといふ人こそな真にい  
里てをうしれたもの何れかひ出来にうると。ゆかりはさるをうしむ。  
わとびすはるうになれたまきば。これをもいふてとらる。此のあふた  
いとくひととあひ月がなつこほるぎはとあかうにぞんこつ。後  
徳大寺の大長オトギのちろぎはなれたつらうをながむきばう有明の  
月ぞのとらるといふ哥はころをされうとらるかうけり。君い  
うめでう海ひ一坐のすれ人どり。これくんとつらうと我々おとら  
これやんごとなれた君ハ。哥のこつとあつとまらう。つさぬかうけり。うこ  
さやうにり。此多か。句の長短はようて。うし。何れをばむるもの

よいあはれをかの一とあひ月がなつこほるぎはとあかうにぞんこつ。後徳大寺  
のうし注釈なり。かうよい何れとらう。つさぬかうけり。三十一のハ  
さうにもいふ。十七のうても。うさうなれたおひつとされうんや  
けらむう。のそせは。其角嵐雪など。此とれたの発句はいとんもこ  
と何れし。今の梅室蒼札号のうし申は。三十一のうのおよぬ  
かおかうもや。いひとて。ゆさそ。此十七のうもは。さば。う。一。う  
二。う。うも。ゆきん。つ。う。は。べ。せん。う。う。言葉。つ。う。ひ。の。ち。や。な。は。は。と  
さう。ぬ。と。た。何。う。て。お。と。ひ。の。か。が。た。み。う。た。は。い。う。ぢ。う。ぬ。さ。は。ち。う。  
萬葉集よ。このうのう。や。た。さ。こ。ま。む。ひ。射。は。と。か。て。ハ。え。る

にさやうとあるは、田方アイカクハみるにさやうのこゝろ哥のころ、  
上の十九字ハまゝといふをいせんが先まつるか、毎つゝ  
なり、さき紙序歌といふなり。これのさき、  
江戸の仲田顯忠トシタカのころに

はるる川海カハあわさるのしかとてせんふもなぐらうたな我  
結句の七りぞろにて、  
きづいでよいづつ

明石北浦に柿本の清社を建てるはかのく、  
多しと曰本今昔物語ハ小野篁のころにて、  
つぎ

まついで、既ニ先達もそれよりいふ、  
南北朝の書に、  
明石の浦人丸塚マシマはうで、  
構カマいちくね半まで、  
は芭蕉塚ハシヨウなどのやうなかのく、  
たうなる書ども、  
たうなる書ども、

とよめ、こハ明石アカシと證アサヒとをうける、  
とよめ、こハ明石と證とをうける、

かくいへば古書といふとぬ法社なることなるし。

河内又山本等美隆といふす人阿村田春門翁のそつ子に  
て歌集物語をいといふく心得る人なりおのき経波又あつ  
しおとい村田のゆかりとて歌集よおこせなごしてむつまうし  
るり死なほえより遠ううぬるうなれば春のそらうれがや  
をとつひて一よやどり家又つとめて胡花といふを頼ま  
歌よ申んとて里人の内もこのそこのむが多うるをいふ  
そハ小林元雄主の領う所よおのづうめいにならひ  
てうらうらうも多ううらうさてあらざ美隆がよめふ。

近世名家歌集といふ近頃板とある書を見るに大く草  
聖集紅塵集鮫玉集の抜書なり集をつら世も弘めとな  
らべ人のうらぬをさづけてそののすきた既すれも同もあそ耳  
はうらをのこかくま下つめら何のうひう何といふといふ  
やう紙をこたひなりこれどこ書肆の利をかりはるんより類  
題なごして見はちがらわらば學者をそのう一つくせむなれば  
さのといひつづねかどの罪も何れもいへ棋集の志も何れも今  
の世は行ひぬともどもより抜出すなごつたはれをやくて人の



目も耳も心をさくからぬをむねとをよう。この名家故  
集のようぢうていよまは阿くは外の類也かほくひ多しは  
しつて取のきくはる哥をいふをかりうらこぶては道令  
法師が霊の友もえんこめ。むうもなくやをあら大う。世  
まうらとけする哥を阿くは。まむをふくを祓をはうふらより  
も功德いみうらづ。なごうそれ功德をうらて。そのなれかそふ  
もつて人と祓が。ごら。  
萬葉いさし。多れども女をやうぬ弊阿く。三代集いうらけけ  
とれどもはやうなうぬつひ之阿く。新古今はたやうなれども弱

死つひ阿く。草花いふはうなせども浅えうたつひえ阿く。三  
玉はぬらなれどもすくぞ。弊あり。大うぬかくさぬ。又初葉  
のふれよんとはる集ども。はせバくふつひこの阿く。とあり。  
んをともひてが。ひよむ。このらさくのよれうたうを具し  
くうら。いづこまう。阿く。ん。吉祥天母をおとひうけんとすれば  
かうら。たう。うら。ん。そ。ま。ま。び。う。ぬ。づ。と。草花の  
ま。な。は。め。ま。う。ら。の。哥。の。を。し。も。む。ぬ。か。ま。や。  
鈴屋集。安藝の廣しは人未田芳磨とえく。うら。後。又。編  
磨と改め。い。う。う。古。を。ま。ま。し。人。な。う。し。と。ぞ。その。子。り

○ 哥の二

廿八

誠正種磨として、もろかろり多う。それ誠正が子又正道種磨が  
子又正勝直樹として、何うこの三人も、さちせう人をいくばくも  
こそぬよとひならふ。ともよおのがを、しつ子となりて、おかぢ父  
ちりをつぐんとつと、先世あよ志いとせちたう。家のまごも何うぬ  
幸をかぐ三代うけて、侍へつそむ、ぬぐひ世はおかろり人や、い  
とめづりし、ぬまめく、なり多う。直樹は、いつと、身はうけし、うか  
ぬこも、足よとて、兄の正勝がりとより、おろり、いあんばくの、何るを。  
ろよ載、ゆるも、申と袖ぬき、よ次が、なりう。

そら風よ松の雪ちれ山うげ、いふ、ぬひまも、らとら、月う那

み、花のあ、の、む、て、ま、本、ま、ち、る、も、は、び、り、ぬ、む、る、ぬ、の、つ、ゆ  
清輔朝臣の歌よ、ゆく、さ、ね、を、い、て、ひ、て、お、ろ、る、ら、り、ぢ、に、ん、も、な、ね、ら、  
か、ら、ら、か、ら、ら、ら、と、ら、ら、い、保、成、の、松、風、よ、け、さ、ね、を、ま、ら、う、に、い、の、る、こ、か  
れ、ぢ、よ、う、え、ぬ、い、お、い、の、か、ら、ら、か、ら、ら、ら、と、こ、ゆ、こ、ね、ま、よ、う、て、よ、は、ま、き、い、  
る、よ、や、何、ま、う、と、う、過、こ、ね、ら、や、う、な、り、と、し、う、ら、ご、つ、人、何、せ、と、四、の、白  
の、ん、も、な、ね、い、と、何、る、せ、り、に、引、き、ま、た、て、ま、ね、よ、う、新、ら、う、く、な、う、に  
ら、う、上、手、の、手、際、い、く、る、ま、ま、何、う、い、る、も、れ、ど、う、  
都、よ、て、名、言、記、う、こ、よ、ぬ、い、景、樹、の、公、羽、季、磨、縣、主、の、ま、ご、う、な、り、多、う、  
それ内季磨、い、む、祢、と、ぬ、ま、ゆ、ら、ら、ら、を、よ、こ、か、こ、う、て、ま、ご、の、言、れ

系よんりぬ人なり。物よくん得る人。はのこしひもよら  
ざりし。よや阿うん。香川いひとつのうをくばておこす。こはるで  
よこふ。し。る。體サッを改め。る人なる故。よ。をより。とおおひつ。人。  
ま。ご。ひ。ま。ひ。な。ご。て。その流をやうくひらぐ。い。れ。バ。縣。ま。よ。な  
ふ。つ。よ。づ。く。も。何。う。ぬ。このさの宗匠よん。富士谷。所。杖。を。成。章  
の。流。を。つ。ご。る。人。よ。て。家。の。子。は。さ。故。う。又。殊。なる。もの。ま。よ。よ。こ。く。ち。も  
ん。に。く。この改まで。も。な。ご。て。う。は。う。は。こ。し。を。一。門。を。開。く  
づ。く。又。く。う。し。よ。も。さ。や。う。身。は。う。ら。ら。な。ん。何。う。し。れ。よ。う。ある。故。も  
何。れ。の。類。歌。の中。よ。何。も。こ。し。て。よ。な。を。う。い。づ。ん。な。る。と。

す。が。其。流。の。な。ご。り。同。く。り。なく。ひ。な。ま。つ。を。め。れ。お。お。や。の。や。せ。よ。ら。う。な  
と。い。よ。い。勝。せ。る。や。う。に。す。ゆ。る。言。は。く。な。る。よ。い。づ。れ。の。集。り。も。の。せ。て  
ぬ。い。う。か。ら。事。よ。う。  
江戸よハ。岐。ゆ。ら。う。と。い。と。な。か。ら。よ。い。な。れ。ど。お。の。せ。い。は。ご。こ。の。せ。ぬ  
ふ。な。れ。ば。書。お。こ。する。人。も。を。さ。く。な。い。は。ら。か。う。な。た。ぬ。あ。ら。う。よ。つ。け  
て。名。を。け。い。ら。れ。よ。て。い。づ。き。を。上。手。と。も。得。さ。だ。ら。ぬ。弘。正。方。が。よ  
を。記。す。バ。小。林。元。雄。海。野。幸。典。本。村。定。良。な。ど。い。ふ。め。い。ち。は。よ。い  
ひ。も。や。ぬ。ら。う。は。て。う。ら。ら。う。と。も。このさの宗匠な。ま。い。と。や。ん。ご。せ  
か。り。本。間。游。清。村。田。春。野。仲。田。顯。忠。塙。忠。寶。井。上。文。雄。前。田

○ 哥りり二

反後かどいかなをけうの人のよて世のおぢえらちをけうは  
とうくよめづーくよこつめせどなか中のふならづーとうされ  
どこれうちも松のづうろ老るるまちうねハもひもさげま  
まなやうなうはこうねハうまかちまづれまけーこめてもけ  
つひごころづーなほくのかんこちめよりも非参儀の位  
ともものといふげねもけろく。なふよくはさーしてこんとれ  
巻よふーらけづー!

これの半もやけうん江戸まで大進物けうる時小林え雄  
ぬーのよまけうらいとおかうるを辞同長積がりとうけりておく

くわうりそれが中よ

三十何なり三枚よこむの垣のよらねあよむまよわハけぬ

けいせいもむーまおーむーとてうるたあハけうとをけあふ

これけーの自讃教といふハけうげめせど半けさぬめづーけ  
をうけ言の業なまバールせらなり。

数奇ハ好といふりの萬葉うねなるむーの物語どもよ色を好  
むものをけき人といひ下こあるに髓脳などよ哥をこのむもれを  
けき人といふもともよこの業をたうをへいとものうねをへて  
つゝむる半ハけうでんよふくけあひいせてこのむすぢならゆえ

よ、次きといひふなりき。耕雲に傳ふ。このそのに傳ふといふ牛  
列は阿らべうらばいごかんよういでんとはとら幸なれば、大う  
教向ふにも心得くも、肝要はうす地のんげしひとなり。京極  
入道中納言日來、清子左の二門このその家通なり。彼家よハ  
連者と教奇とをたうぶらよ。連者よりハ教奇の人を執するより、  
故大臣はうらぬひなり。と何るよれば、物學ひをうらかして、  
うらぬはなく古今よと多う。諸体を自はよむ人を連者と  
いひけしも古集などをあうらてなりふよハ何れとたう月記  
のをうらくのかさきとて、詠吟よふる人を教奇といつとお

もいきてうらればこの連者と教奇との多ういハとらうらて、大  
家と名家とのけぢめのど、大家ハすれら連者なり。名家ハ  
やうて教奇なり。かて、耕雲に傳ふ、冷泉家よ連者より  
ハ教奇なり。を執するより、京極入道中納言日  
來といふいさう多う。説のやうなり。いさうも後世よなり  
てハ、清子左の人、學文をうらといせは、詠奇をのいむ  
とせしは、うらよ。人をもうらふも、ごよはくを何るらめど、  
家ハ中よ教奇のうらうはて、連者の名をおよつて  
死くよなんかり。うららそ此後ハ、後き、那院の清に傳ふ。

彼々ハヒトの才知なるふなれたまうてとのふつるをうらづ大  
くその世は定家家隆となく称して一対のうらよとせやうに  
おぢえする人おかくれど家隆ハ才知人なり。定家は達者なりけ  
しハ定家の才の中より撰りとも。家隆の風骨ならいとも何  
るべし。家隆の才の中よりハ定家の秀逸よりよづれた海づ  
うりなん。こほまて救済よりハ達者のひと記さかじりなりを  
はとらづ。但達者のうらみをたハめん事も。救済を基とてのが  
ふれたなめせば。つひわてゆきを救済のんげしひとつこそ。哥のせ  
んよハ何うせ。おのれ明月記をうかふ。定家々の才知のん

をく浅うらげり。おまふたふく又思ふこり。こまきてこれはよもひ  
いふらふ救済のなめたハ何うごりしを知らず。すれたへうさ  
よはるくものなりと。むうの人もいひおきけるを。あきらむる冷  
泉家のおきてとて。達者よりハ救済のうらを執るはあそ  
いうよといふ。近世の何うかは。物語髓脳などをよく明らめて。  
さし守びくうらぬ人ハ。うらてよと。教はつたなく。たをくり  
録をくち。そめ系のうらといひ。人ハ。中よふこ。さるうら。の  
はえ。うらうて。達者と。次きと。づら。れもの。な。お。は。る。うら。この。さ  
を。し。る。ハ。こ。め。う。ら。を。よ。る。ん。こ。め。う。ら。を。何。も。ハ。ぬ。と。い。う。む。う。り。葉

びのおくをきいりとりとて、哥えよ海下のちぢなきにぢなる  
ゆゑ、學文の達者をおえ、詠哥のすれ人をすくめ、けしき  
るべし。けしきは耕雲のてまふを、このて、達者をなせ、けしきは  
ふべく、次も、後も、羽院の傳説より、て、定家をすれ、けし  
と、けしきを、けしき。

ある人のかきも、けしき、すれ、けしき、けしき、けしき、けしき、  
て、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、  
取茶トリヤと、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、  
けしき、鏡は、旋覆花、須馬、比久、佐と、けしき、て、世を、けしき、けしき、

秋の花のこゝなり、いふ、なる、故、て、この、花を、すまひ、ひらき、といふ、けしき、  
そ、いふ、けしき、を、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、  
外、よ、けしき、よ、けしき、の、有、こと、なる、けしき、源順集、よ、こと、けしき、い、こ、けしき、  
ゆれ、ど、すまひ、ひらき、つ、ゆ、い、けしき、の、よ、けしき、けしき、と、よ、ある、けしき、秋、の  
歌、合、の、判、の、けしき、な、れ、けしき、春、の、相、撲、取、茶、を、こと、けしき、よ、けしき、引出、けしき、  
お、が、え、けしき、但、判、けしき、三、子、世、と、けしき、けしき、を、けしき、けしき、けしき、けしき、  
くら、ん、けしき、お、わ、ひ、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、  
けしき、けしき、て、判、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、  
集、よ、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、けしき、

はとりそとあるまはし〜く妹のう〜なうすや〜れば今の相  
撲取草すれいちい〜人のは〜れま〜い〜のはまひ〜は  
そのもろはなることち〜まう〜ぐひな〜す〜れは昔人は  
死たうといふハ藤袴ハ菊なりといふぬぐひまでおのが後を  
ま〜でもぬきもうけひくは〜ればことわらばぬ〜はす  
はひぐちハなほ次〜れの又の名もやとお〜人人もなれは  
何らぞめれば〜く〜う何ら〜ふま〜んとは中の長尾の里  
人小野務が随筆ま〜る〜りこは務といふ人おのれい〜で  
何ひ〜ことハな〜れ〜ことま〜り〜ま〜は〜と〜なりを〜

ま〜と〜お〜い〜と〜か〜は〜は〜き〜人〜なり〜と〜ぞ〜録史の〜〜な〜何  
は〜よ〜め〜る〜。〜玉集ま〜ゆ〜そ〜中〜ま〜を〜〜と〜お〜が〜ゆる〜た〜一〜  
上件まのせ〜り。は〜と〜や〜の旋覆花。古名ハ加萬都保といふ  
伊勢集物名ま。こ〜はつ〜か〜ら〜と〜よ〜め〜る〜も〜これ〜なり〜ん〜。これハ  
字鏡ま次〜る〜ひ〜と〜ち〜と〜ある〜ハ〜一名なる〜。こ〜う山〜ら〜り〜ま〜  
す〜れ〜より外ま。お撲取子といふとの何せと。死はうぬま  
ま〜下〜金葉集の連歌ま。そ〜う〜な〜く〜う〜つ〜る〜花〜な〜れ〜ど〜い〜る〜ま〜か  
な〜い〜孫バ。とよもかくよも次まひ〜ら〜さ〜ハ。旋覆花の一名なり  
といえん〜。種〜なる〜。と。諸平い〜。



筑前ハいみ一 大宰府を治る一 國まで都よりくさるた  
る官人治かうり一ゆ急よ。天はくさひながる。何事もみ  
わびつかりらんかど。四にあしどもを治りてかりきり  
そむおごりよやう。よこふこりて。阿そよともがら。そもたえ  
はあるより一なれど。治のせと。かよ。す人ひより。たよなけ  
き。は。ず。り。ち。よ。次。ぐ。と。な。く。て。う。ち。を。さ。る。よ。こ。は。ご。ら。阿。る。人。の  
ぬよりよ。葉山磯名が頼義朝臣をよめるう。を。記。け。り。  
いとをう。う。せ。ば。ま。づ。こ。の。よ。の。せ。て。つ。た。く。よ。阿。ま。つ。つ。ど  
ひ。こ。ん。ま。る。一。と。次。

む。祢。あ。と。ぬ。人。な。び。ん。と。ら。む。む。治。り。も。く。ゆ。ま。ぬ。よ。の。細。布  
勝る因盛稔云。雪玉集よ。山。う。げ。よ。む。と。り。の。さ。り。て。は。く。花。を  
治。く。す。春。や。ゆ。え。ん。な。た。り。昔。春。残。花。の。う。さ。か。り。源。氏  
の。若。菜。よ。あ。ま。君。お。ひ。く。人。あ。り。う。も。さ。ら。ぬ。さ。う。茶。を。お。く  
く。す。春。や。ゆ。え。ん。な。た。り。こ。は。く。さ。り。お。も。ひ。よ。り。ぬ。る。な  
めり。源。氏。なる。は。紫。上。の。お。ひ。く。ち。ぬ。り。ん。行。す。急。も。忍。か。う。て。  
依。よ。お。く。一。う。た。た。ん。半。の。か。か。り。し。を。尾。君。の。よ。め。る。人。  
こ。か。く。し。を。紫。上。の。う。さ。か。り。を。尾。君。さ。う。く。は。半。り。て。を  
う。一。記。る。ぬ。か。る。を。雪。玉。集。なる。こ。の。薨。來。を。う。い。と。を。う。

於のき一とせ残花をうつ鉢て山里よとの一たり一をり  
いみじうんまーにておぢるー。同集よ。殊る夜の月を  
かすこ此袖ながるゝわさるびそむる香のこ急うか  
も源氏の梅がえよ。かほこよよ月と花とを一つてずいね  
どうの香もかこらひなま。こけうたよりい下来たるも  
のなり。かこらぶるとい。花を餘情よ。とり此軒とくそ  
めて幸くんなりと有り。こよの款。三玉挑る抄より  
せりとおかゆ。挑半抄ハ傳前の岡山の殿人野村尚房  
字ハ権六郎。號ハ一枝軒といふ人の有り。ハせる書なり。

三玉集のうらさて、續撰吟。一人三長抄。一字抄抄など  
はうちより。和漢の證文有り。かぎりも。而三十餘部の  
書を引て抄出さる。それ中まわりのけうをわき  
まんかちちきり。記半なり。や  
源の齊昭やと中たいまのる。今の水戸の中納言殿よ  
ておりのま次。この君れかせぬつる。この中に。神楽歌  
よ。こやまよ。いあもれふる。外山なるまは木のかつ  
を付よる。易に履霜堅氷至と見えたり。何事もそ  
めのな。ひいかく。そつと有り。ごよ。哥。い。さ。ゆる

面向不背のとのよて、何れれの数のかよもとりなせば  
とりなざる、なり。今も萬葉の内なるをよく味ひひて、  
抜いてなほ、待經といえんをうりしめでたき書も、  
ぬづくや、藤垣内、解の山常るそ、いそれん、あつひまで撰  
むれ、うるなめるを、いかにぞや、  
んのもれ、く、なせ、  
何とび、  
べし、  
大日本史の教人傳に、皇朝立為専門之業との、

うべ、  
うべ、

て保のとをさりよとせのかん、  
くまか、  
く、

養系、

がうなれ歌ぐり巻二早

*(Faint bleed-through text from the reverse side of the page)*

寄居子庵大人著述目錄

冠禮考 全二冊 近刻

昏禮考 全二冊 近刻

この二部とも本邦神代よりの冠昏の古義試あざら  
し今世のさぬふり来りる事ともを記し  
書なりこの外不喪礼考祭礼考も何れ  
て稿ふハ既にか  
くはれといま葉を  
つれずなか次  
不出付るべし

標注令義解校本 全 近刻

類題雪間此こな 全六冊 近刻

こハ古今集より以下此勅撰家集の内よて  
とも優き  
る歌とも成  
つめ類題  
ふせ  
は  
なり

がうなれ歌ぐり 初編一冊 既刻  
二編一冊 嗣出

○再考

この今世ふ名高に人々の歌どもをけりめりる奇説  
珍話をもとめてつものさしはるおりの記書ふて  
と一冊毎小一冊して出来付るなり

古風三躰考

全一冊

この短哥長歌旋頭哥の三躰のこと成審く論ハき  
書なり

彫刺師 藝州廣島 日山 山口 宗五郎

寄居歌談 三編 嗣出

未古齋藏板

弘化二乙巳歲

藝州廣嶋播戸屋町藥舖

弘所書林 井筒屋 忠八郎

出店

○哥なり

